

71
89



始



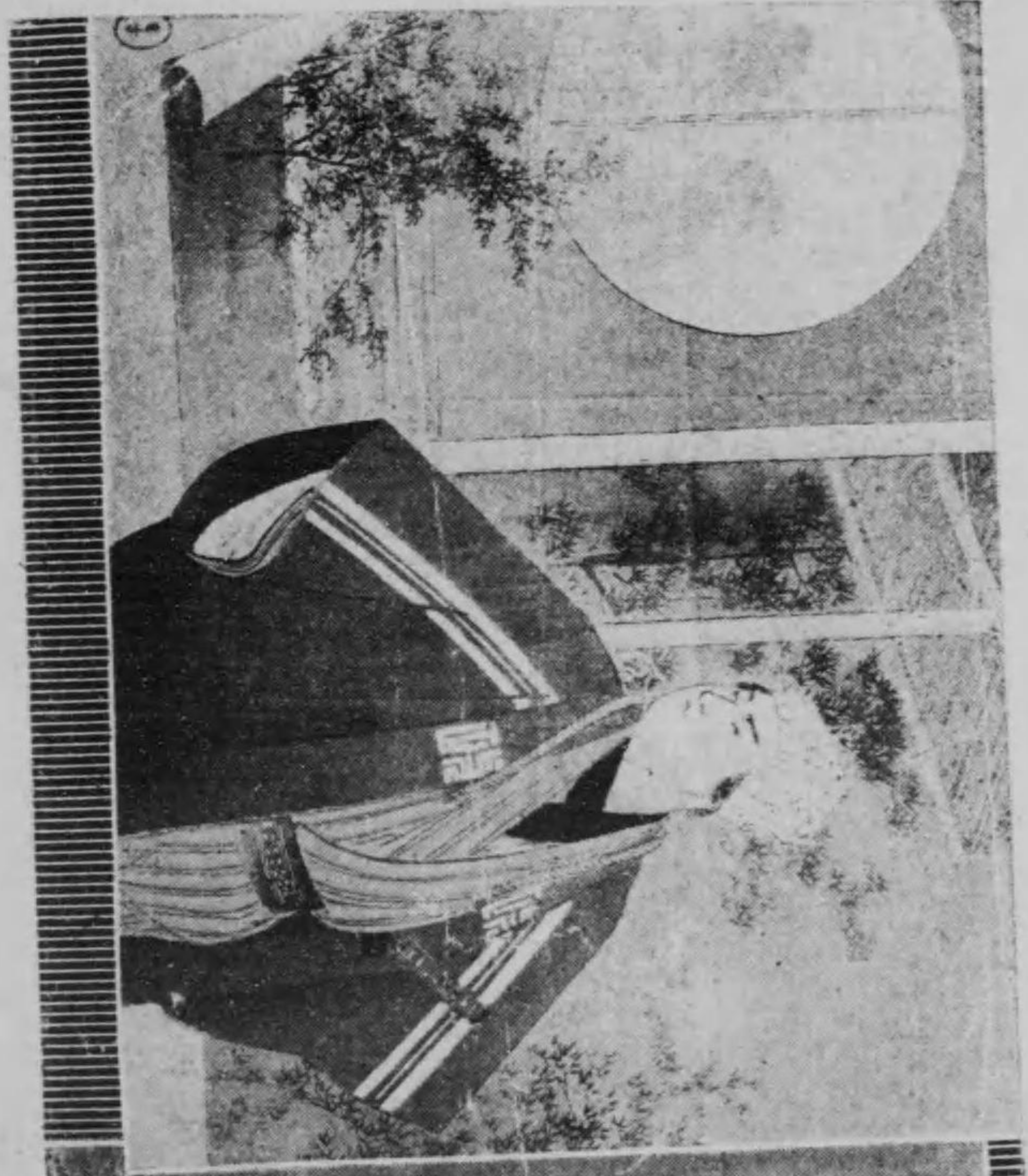
71-489/4



海士全集

海士才

大正
10. 6. 30
購求



浪六全集 第拾編

浪六著



當世三人兄弟

およそ世の中の貧富を見るに、おのれ一代の間に空拳を振うて幾百萬の大身代になる奴も
事の顛倒なり、おのれ一代に祖先傳來の家庫を揉潰して路頭に迷ふ奴も事の顛倒なり、人生
五十、朝日星を戴いて家ぎ夕に月を踏んで働くとも、間違はざれば何として俄に人を驚かす
の大金持となるべき、世間普通三度の食に奢りて四季の衣服に美を盡すとも、間違はざれば

當世三人兄弟

何として有餘る金銀を一朝に失ふべき、かれも齟齬、これも齟齬、間違うてこそ世上の人事一切いよく面白けれ、

なるほど金持つ奴に怠惰者はなけれど、また金持つ奴に智者と學者は尠く、まづ人に押附けられて、しぶくながら一坪三圓に買ひし地面が忽ち羽を生して百圓に飛行き、遊面つくりながら半泣に受込んだ義理合の品物が世に出て希代の高價を現はし、せめて千圓と思ひし利益が案外に跳上つて一萬圓となるの比類、皆これ自己が胸算用がらりと間違うて肥り行けばこそ寒中の破布子一枚より身を起して竟に臘虎の夜具で寐る奴もあるなり、え、ま、よ地獄の上の一足飛び、これでゆかずば死ぬ覺悟とまで思ひ切つて張り當てたる一朝の金満家などは、わけて間違ひの大なる奴、なるほど家を失ひ身を落す奴に勤勉家はなけれど、また落魄れるほどの奴に無器用と馬鹿は

尠く、十年の前途を見越して投込んだ資本が三年た、さるうちに何處へやら消失せ、おのれから飛附いて喧嘩腰に筆を取つたる品物が世に捨てられて損を重ね、あるは一攫萬金と覘ひし先見の明が美事に外れて思ひもよらぬ鵜餅桶に足を踏込みつ、さしも抜きもならざる腹立まぎれに今更ら及びもない糞度胸を現はし、家庫ひつさけて九死一生の武者振、これぞ討死際となつて、もはや息の根もつかぬ曉に思へば、悉く自己が胸算用がらりと間違うて消え果つればこそ、世の諺にいふ傾城買より紙屑買となる奴もあるなれ、されば人間の貧富は、順に間違ふものと逆に間違ふものとの差別のみ、その中間に生涯ぶらりとして先祖代々の空巢守を業とし、たい白き飯を喰うて黄なる糞するばかりを藝能と心得たる徒輩は格別の論外、たい願はくは順に間違ひたしとて日夜いづれも心を碎けど、奈何せん多くは逆に間違うて阪落しに落込みゆく其の中に、これはまた大間違の親玉、しかも順風に帆

をあげて浮世の浪風を一瀉千里の勢ひに富み榮えたる男、澤田雄藏とて資産は尠くとも百萬の
の上に數へらる、當世紳士の大立物ありける、

澤田商會、澤田銀行、澤田肥料店、澤田製皮所、澤田製絨所、以上の五會社を一手の我物
として、本宅は東京の築地に和洋折衷の大建築、宛がら華族を食客に置くほどの勢ひにて、
すべての事務を取扱ふべき澤田商會は銀座の中央に四層の洋館を輝かし、製皮所は巢鴨の奥、
製絨所は品川にありて、これが金融機關に備へし銀行さへ世間普通の專業者よりも却て繁忙
を極めつ、別に大阪、神戸に支店を構へながら、これほどの大紳士に別荘の設備なく妾宅の
風評なく、さては花柳の巷に新聞の艶種を植ゑざる所は、此男の一流、どこやらが人に過ぎ
たる逸物とぞ聞えぬ、

なほ此他にも澤田雄藏が所謂る當世の紳商に異なる點は、大の下戸にて一滴の酒も舐めず、

また煙草は人の餘煙に逢うても咽ふほどの禁物、書畫骨董は元來の嗜好なれど我いまだ其地
位に到らずとて更に道具屋の出入を許さず、歌舞音曲も悪うはなけれど身に閑暇なしとて藝
人の名さへ覺えず、さりとして浮世さまの浪風を凌ぎ來りし古兵、そんじよ其處らの事も
先刻御承知なれば人の紅粉に迷ふを見て叨りに諫めず咎めず、また生來の吝嗇ならねば無用
の財を惜めど人の難を救うて恩を叫ばず、唯おのれが好むところは家屋の宏壯と衣服の新調
と三度の食事とは殆ど王侯も及ばざるの奢侈を極めつ、常に配下を戒めていふ、住は人間の
氣宇を廣め衣は人間の品位を進め食は人生第一の必要、文明の利器を運轉する石炭に等しけ
れば、なるべく其質を選び其用を惜まらずして身體を養ふべしと、またいふ、右の手に一錢銅貨
の重量を知て左の手に萬圓の紙幣を軽く持つものにあらざれば以て財を語るに足らずと、を
りく、野心の政治家より名譽の二字を捧げて引出さんとせらる、時、おもむろに笑うていふ、

我等は宜しく奮勵して飽くまで富を積み、その富の幾分をもて公等が演劇の舞臺を普請すると共に、また自から上等の棧敷を買って見物すべき地位なれば、役者と観客とを兼ねる事なり難しとぞ答へぬ、

其二

おのれが姓をそのまゝ冠せし五會社を我物にして、當時紳商中の立物と呼べる、澤田雄藏は今年六十一、されど姿も心も世間普通の老爺めいたる體は更になく、赤ら面に肥え太りて便々たる腹を突出しつゝ、常に一頭立の馬車を自から驅つて風雨寒暑を厭はざるの勢ひ、なほ天下の少壯と氣魄を争うて五百年も生伸びんとするが如し、
澤田雄藏は元來紀州熊野の山奥に生れて、猪猿と同じ境涯に終るべきを、十六の時、かの紀文大盡も我と等しく此國より出でし男と聞いて、眠れる如き兩眼くわツと見開き、をりしも兩

親に別れて兄一人の厄介者といはれしを幸ひ、錢六百を懐中に捻込んで出奔し、わづかの縁山を求めて大阪の一商家に丁稚奉公せしが、腹の底が太うて心の働きが細かく、根は正直ならねど我を動かすほどの面白き大悪に出逢はずとて日夜忠勤を盡せしかば、二十三の曉、天晴の手代となりて二三萬の身代より婿養子に望まれしを、ふんと鼻頭に笑うて大阪を飛び出し、そのころの江戸に出でて三年、たま／＼横濱の開港に出逢うて千載の一遇この時と力足を踏みつゝ、生命一個に度胸を添へて賣物同然に働きしかば、忽ち一個の商店を開いて雜貨を業とし、三十の曉には既に數萬の財を積みしといふ、されど元來の太腹に喰足らねば、をり／＼人の恐る、浮世の谷に丸木橋かけて走渡りつゝ、明治八年、もはや横濱に落ちたる金銀なしと見るや否、争うて入來る尋常一般の商人を見返りながら、おのれは悠々と立去りて東京の明集を覗ひ、京橋の通街に西洋小間物の店を開きしこと五年、この間に得たる利益は殆ど二十餘

萬、あの勢ひで澤田が跳廻る將來の至盛いかならんかと、同業者いづれも舌を巻いて恐る、眞最中、さつと店を閉ぢて暫く集鴨の奥に引込み、二年ほどは茫然として浮世を忘れし體なりしが、あはれ其間に幾何ほどの野心を蓄へけん、またもや疾風の如く飛出して一時に製皮會社と肥料店を起し、果は製絨所を設け銀行を立て、より、ことし六十一の今は二百萬以上と呼ばる、當世紳商の大立物とぞなりぬ。

澤田雄藏の妻は、始めて横濱に雜貨店を開きし時、男世帯の不自由さに備ひ入れたる婆の娘、いつしか家に呼び入れて手許の小用に使ひしが、きけば母子たゞ二人、維新の際に討死せし幕府御家人の筋目とて、どこやら尋常に生れたるを幸ひ、なまなかの商家より小面倒なる儀式三昧で迎へんよりはと、戀にはあらず雙方談合づくの妻に持ちしが、この女また良人に連れての才氣ありて、こゝに三十餘年の夫婦めでたく、しかも男ばかり三人の子を産みて、

兄なる雄太郎は今年二十八、次男の雄次郎は二十六、三男の雄三郎は二十二、いづれも蟲氣一つの病煩ひさへなく成長して、澤田家に醫者と貧乏神は近寄る寸隙なしとぞいはれぬ、

長男の雄太郎は商業學校を卒業してより茲に一年、銀行部を引受けて若年ながら天晴父の名代となり、次男の雄次郎は農科大學を目的として肥料店を其ま、譲り受けんと決心、三男の雄三郎これはまた二人の兄に飛越えたる面魂、幼少より親の手には餘りて聊か根性骨の横に突出でたる上、いづこの學校に入れても喧嘩口論の絶間なく、教員に逆らうて飛出し、いづれの私塾に入れても寄宿舎の風儀に關するとして追出され、果は其ま、父が手許に引附けて會社に使ひしが、社主の祕藏子息とて社員の尊敬するま、に傲慢放逸いよく事務を攪亂するの恐れあれば、竟に持餘して今は築地の本宅に暫時捨置の境涯を結句の僥倖とし、鐵砲かついで烏うちやら、漁網ひつさけて舟遊びやら、自轉車、競馬、相撲、擊劍、柔術、なんでも御

坐れの我ま、に流石の父も呆れて、彼奴ばかりはと眉を擧めて心を痛めぬ。

其三

澤田家三人兄弟のうち、長男の雄太郎は色白の優形にて、しかも其性の温順にして人に深切なるところ、其品行の方正にして事に周到緻密なるところ、どこから見ても當世紳士の家を嗣ぐべき天晴の資格を備へて、いはゞ出来すぎたるほどの男振、されば父母の寵愛よりも社員の敬服するもの多く、社員よりも更に世間の信用あつく、才と學と財産の三拍子みごとに揃うて年輩も年輩なりと、四方より争うて令嬢の競賣同然に迫れども、本人の雄太郎は聊か思ふところありとて、三十五歳の曉まで誓つて無妻を主張せしかば、いよく名木に花咲く心地して羨まれぬ、

次男の雄次郎は、父が若年の體格に似たりとて、進退どこやら無造作にして満面いつも血色

を帯びつ、でツぶりと小肥りに聊か脊は低く、目鼻の間に自然の愛敬は含めど人に接する時は言葉に曲折の艶を持たず、また別に頭腦の冷かなるところは殆ど我は我なり人は人なりといふが如く、物に同情を寄すること淺きかと思はる、體なれば、家に入りの社員も世間の評も兄の雄太郎に及ばず、なるほど他日の農學士として肥料店の主人となりて適當の人物とぞ思はれぬ、

こゝに父にも母にも偕は二人の兄にも悉くうって變れる三男の雄三郎は、その容貌までが澤田一家の系統にあらざるが如く、おのづから一流一癖の我ま、三昧に育ちて、鷹の如く丸く光れる眼中をり、冷笑を帯びて物を嘲るかと思はれ、太く迫れる眉と高く尖れる鼻、さては一文字に固く結べる唇端たま／＼開いても自然に毒を含んで人に不快の念を與へながら、おのれは例の鳶鼻ひこつかせて阿々と笑ふに似たる風情、身材また兄弟に勝れて高く、骨節

どことなう秀でて進退止の常なきのみか、室内緻密の業は小面倒なりとて嫌ひ、机上刀筆の事務は我性ならずとて顧みず、その得意とするところは人を驚かす牛飲馬食と世に憚らざる傍若無人の振舞とのみ、されど機を見て忽然これに應ずるの才は電光に等しく、敵と見て飽くまで遁さざる猛進の氣は獅子の小獸を追ふに等しく、自己より目下の者には千金を抛けて與ふるの概あれども、自己より目上の者には一錢も争うて掴み取らんとするの勢ひ、しかも不羈僇儻にして毀譽褒貶を河童の屁とも思はざる大膽さ、失敗艱苦を何の絲瓜とも心得ざる平生の面魂、もし此まゝに進まば竟に怖るべき最後に終らんかと、いづれも舌を巻きつつ敬して遠ざけ怖れて譏りぬ、されば父の雄藏しばく腹心の者に語りていふ、二人の兄を蹂躙して我家を一朝に叩き潰さんものは必ず三男の雄三郎なり、二人の兄を小脇に抱へて更に我家を興さんものもまた三男の雄三郎なり、彼奴は元來これ澤田家の盛衰興亡を卜すべき佛

と鬼とに生れたる奴、願はくば彼をして澤田家に關せざる人物たるの幸運を祈るのみと、雄三郎これを聞いて、あゝ年は取りたくないもんだ、今から乃公を氣にして愚痴を滾すやうぢやア、流石の老父も少々糞が弛んで來たわい、何の糞、百萬が二百萬でも出來上った身代に目をつける乃公と思ふか、同じ種で同じ腹から出て、鑄型で流し込まれた二人の兄たア聊か膽魂の居所が違つて生れた雄三郎だ、どりや一運動して來てやらうかと、幸ひ父の不在を覗うて自己みづから馬車を驅出し、東京市中を四方八方に馳廻つて馬も車も散々に傷めつゝ、立歸りしかば、父の雄藏いよく呆れて怒りもせず、あゝ困つた奴だ、

其四

おのれが専有の五會社さへ、世間普通の精力にては逆も及ばざる繁忙の身を、また免れ難き交際場裡より追はれて年中さらに閑暇なき境涯なれど、習慣その性となりては却て閑散無事

を厭ふべき程の澤田雄藏が、今日に限りて、一切いかなる客來をも謝絶し、家人までも事うるさしとて平生の我居室を立出でつ、客室の扉を閉ぢてストーブの前に安樂椅子を差寄せ、宛がら我身を投ぐるが如く横たへしま、瞬目もせず燃え上る石炭の火を見詰めしが、をりをり無心の手にトングスを取つて搔廻す體、さては珍らしからぬ窓懸の地模様を半眼に見上ぐる體、果は兩腕を組んで思はず溜息を漏す體、これほどの身にも金にも叶はぬ仔細あつて人しれぬ心の苦痛を忍ぶかと怪まれぬ、

をりしも外面より扉を叩く音に、はつと我に返りしやうに、椅子に横たへたる身を靜に起して「誰だ、誰だ」

扉を押開けて入り來りしは十五六の小間使、コーヒーを盆に上せて持ち來りつ、ストーブの傍なるテーブルの上に差置きながら「あのウ、晝御飯は何に致しませうか、伺つてくれと申して居りますから」「む、何でも宜いよ、別に好みはないから都合次第にしろつて、さういへ、時に雄三郎は居るかな」「はい、今朝、どツかへ自轉車でお越になりました」「ふむウ、何時ごろか、して何處へ往くと云つて居た」「さやうで御坐います、たしか八時ごろかと存じますが、どこつて別段、奥様にでも伺つて参りませうか」「いや聞くに及ばん、もし歸つて來たら直ぐ來いと言へ、此處へだぞ、すぐだよ」

あとに雄藏また一人、傍らにあるコーヒさへ手に取るも物憂き體に、およそ一時間あまりは其ま、身を横へて、兩眼を閉ぢつ、何をか心の祕密を繰返すが如き折しも、さつと半面を吹く風の氣配に驚いて見返れば、三男の雄三郎この入口の扉を無造作に突開けて立ちぬ、「何か御用ですか、今、戻つて來ました」

雄藏そのま、安樂椅子の身を起して、またもやストーブの火を掻き立てながら、「そこを閉て

て、ちよいと来い、此處へ」

雄三郎、つかくと歩んで片隅の椅子を引摺りながら、父に對うてストーブの前に蟠るが如く身を寄せつ、今日に珍らしいこつてすな、どツか身體でも、お悪いんですか」いひつ、埃及のビーオーを白く一文字に吹出しぬ、

雄藏、じろく今更めて我子の顔を見ながら、平生にもない重き言葉を刻むが如く「別に身體が悪くもないがね、少々、心が悪いよ」「心が悪い、心持がお悪いんですか、ぢやア矢張り身體に何とか申分があるんでせう」「なアに、さういふ意味ぢやアない、身體には一點どこといふ悪いところもないが、心、乃公の心にね、いさ、か病氣が起つて居るのさ」「へエ心に御病氣たア」「心の病氣さ、そのまた病氣の原因といふなア外でもない、雄三郎、貴様だ」いひつ、俄かに身をあらためて兩眼くわツと見開けば、雄三郎は思はず腰うち掛けたるまゝ、

の椅子に兩手をかけて進みながら、父の顔じツと見詰めて「御病氣の原因が私とは」

其五

あの人の今日あるは、其才氣と膽略と幸運のみでなく、第一が萬人傑出の勉強力と身體無類の壯健とにあれば、白髪なほ壯者を凌いで意氣さらに屈せず、死する時が即ち事を止むるの時なるべしとまで、いはる、ほどの父が今日に限りて一日を空しう閑散無事に送るのみか、我の歸宅を待受けて人なき一室に差招きつ、近來この心に起りし病源は汝にありと目に稜たてし勢ひに、さすが無頓著なる雄三郎も思はず容を更めながら「御病氣の原因が私とは」いひつ、椅子もろとも膝を進めて吸ひかけし煙草をストーブに抛け込みぬ、

父の雄藏、いよく言葉しづかに重く眉を顰めながら、我子の面體じツと今更に打守りぬ、
「雄三郎、汝は全體、何を目的にして何になる覺悟だ、無心に飛ぶやうな蝶や蜂さへ徒に風を

追ひ風に追はれてばかり居らんぞ、まして人間、もはや丁年に達した汝だ、確とした前途の目的を言ッてみる」。「こりやアまた改まった御尋問ですな、しかし其目的を今こゝで言出しても、それが却て御病氣を増すやうになりますまいか、實のところ、雄三郎は少々、二人の兄と其性を異にして居ますから」。「え、餘計な文句は入らんから、たゞ一言、何になるといふ簡単な答をすれば宜いんだ」。「ですがね父上、まだ私が何になるといふ、その目的を御存じない今日、すでに私がために御病氣と仰しやるんでせう、つまり雄三郎が我ま、亂暴で澤田家の家風に反するのみか、従来いづれの學校へ遣ッても盡く半途で飛出した過去の例に依て、あゝ、將來の彼奴はと、ありがたい事には子を思ふ親心で、竟に御病氣と仰しやるんでせう、ぢやア即ち其の事です、過去すでに御病氣となるほどの私ですから、將來の目的を申上けぢやア却て御病氣を増すの道理と考へます、ですから、どうか私だけは退け物として一切お心に

かけられないやうに願ひます、二人の兄が先づ世間で、あの通りの譽め者なり、第一が御両親の氣にも叶ッたりで」。「ぢやア何か、汝、どうしても目的を言はないんだな、取も直さず汝の目的は、乃公が心の病源になつた過去の我ま、亂暴より更に一層、甚しい我ま、亂暴を働ぐ心算だな」。「いへ何、決して、全くさういふ考へぢやア御坐いませんが、どうか私だけを無用物として、いはゆる父の子にして父に肖す兄の弟にして兄に如かざる不肖の雄三郎は、つまり澤田家に一の汚點を附する奴ですから、結局この儘の放任で、まづ私を餘計な厄介者にして置いて欲しいんです」。「馬鹿、幾人の子があつても、無用の退け物にする親があるか馬鹿め、その、そんな料簡で居るから心配するのだ、しかし子として父に言はれないほどの目的なら、もはや聞くに及ばん、及ばんから汝、今日かぎり何處へでも出て行け、決して天地間に澤田雄藏といふ父があると思ふな、その代り、乃公も雄三郎といふ子はあると思はない

から」
 兩眼に涙を含んで睨みつけたる父が最後の一言に、流石の雄三郎も思はず目を瞬きながら、
 雙膝に置ける雙手を固く握り身を締め聲を潜めて、「父上、ぢやア私の目的を打明けて申しま
 すがね、まづ其以前に、たゞ一事、伺ひたいことが御坐います」「何だ」「全體、うちの財産は
 どれほどあるんです」「どれほどって、世間ぢやア二百萬以上だが、實際あの五會社あのみ、
 無事に運轉するだけの方法を備へて、別にまた六七十萬はあるさ」「六七十萬、へエ七十萬、
 御坐いますか、全くのところ」「あるさ、たしかに」「ぢやア矢張り私の目的を申上けるに及び
 ません、あの五會社の外に六七十萬もあれば、もはや物の數と天理に於て、いまだ積善の餘
 慶なき一代身上の澤田家に、私の馬鹿ぐらゐは當然ですよ、はッくくくく」

其六

我子ながらも一癖あるべき奴とは兼ての覺悟なれど、その目的を問へば言はずと答へ、強ひ
 て責むれば目下の財産幾何あるかと問ひ返し、およそこれほどといへば忽然また其目的を語
 るに及ばずとて、果は空うそふいて高笑ひせしかば、流石の父も呆れて目を見張りながら「ぢ
 やア雄三郎、もし、萬々、かりにだよ、たとへば、今この財産を事業と天秤にかけて差引勘
 定なし、空になるといやア汝、どうする心算だ」「そ、其處です、もし今日の澤田家に、あの
 五會社あのみ、無事に運轉するだけの方法完備の上、さらに五十萬以上の金が御坐いますな
 ら、三男に生れた雄三郎などは全くの無用物、生涯このまゝの傍若無人で氣樂三昧に暮した
 いです、勿論、酒色一切の浪費は斷じて仕ない決心ですから、敢て財産に觸るといふほどの
 恐れはない筈、しかしまた父上、もし貴方の胸が利き過ぎて萬に一事、いはゆる英雄よく人
 を欺くといふやうな場合で、今日の五會社と六七十萬の財産が一種の策略より出來上ツて居

るもんならば、この雄三郎さらに大勇猛心を奮起して、一番みごとに父の子たる神算鬼謀を仕遂げる覚悟です、しかも計策を嗣いで事業に繼續さすばかりでなく、その虚を實にして全く世間で風評の二百萬以上に見せますね、あの二人の兄なごア太平の世に尋常一般の輩で、亂世の盤根錯節に用ふべき利器ぢやア御坐いませんよ、ですから、全く只今、承った通りの確乎たるもんなら私は無用物で尋常一般の兄二人が却て有用の人物、しかし、もし萬々一、私が申し上げたやうな内幕ならば、この無用物が却て大なる有用物となつて働く覚悟です、きつと遣つて退けます」

父の雄藏しづかに兩眼を閉ぢて聞き居たりしが、やがてまた身を起して雄三郎に對ひつ、
「ぢやア仕方がない、汝は澤田家の無用物だ」「や、それを承つて安心いたしました、實は此頃、どういふもんか有名な資産家が、あれこそと思ふほどの事業家などが、ばたく」と

將棋倒れに倒れますから、私のやうな無頓著物でも内心、竊に心配して居つたのです」「は、は、、汝が家のために心配するといふなア呵しいよ、時に雄三郎、もし父が十萬の財産を遺して子に譲ると、百萬の借金を残して子に譲ると、どツちが有難く思ふだらう」「へエ、妙な事を、しかし面白い御言葉ですな、なるほど十萬の遺産と百萬の借金、こりやア面白い問題だ、なるほど、無論、兄などに言はしたら十萬の資産を取りませうが、私は百萬の借金が譲り受けたいですな、百萬は借置き五十萬の借金でも面白い」「ふむ、そりやア汝、どういふ料簡で」「どういふ思慮も何もないです、つまり十萬圓を虎の子のやうにして小面倒な一家憲法などと共に親類立合の上で譲られるよりやア、百萬圓の借金しただけの信用を譲り受けたいと思ふんです、十萬圓の金は一朝にして忽ち失ふことが御坐いますが、こゝに百萬といふ借金を死際まで其ま、無事に持ち堪へて來た信用に至つては、一朝一夕なかく、容易に潰

れませんからな、第一潰れかけても債権者が潰しますまいよ、そこでまた譲られた子の腕次第、その百萬圓を天晴二百萬圓以上の借金にして父の法事を勤める奴と、但し半分の五十萬圓を生涯必死に働いて辨償する奴と、父上、貴方は全體、どっちが子に持つて快ですな」

その目的を問ひ詰めんとして却て倒まに問ひ詰められたる心地、この分では此奴そろく父の目的を批判して理窟を並べかねまじき勢ひに、父の雄藏おもはず顔を反けながら、「え、そんな事は今どうでも宜いから、早く彼方へ行け」「ちやア先刻、お尋問になつた私の目的云々は、一應まづ此ま、で御坐いますな」「彼方へ行けといふに」「それでは御免を蒙ります、時に父上、もう自轉車も飽きましたから、私に馬を一頭」「ば、馬鹿」「ちやア追つて御機嫌の好い時に願ひませう」いひつ、悠然として大跨に立去る後姿を、父の雄藏しづかに見送りて思はず溜息を漏しぬ、

其七

澤田銀行の奥まりたる別室に、一年以前より父が代理として一切の事務を擔當せる長男の雄太郎、今や頻りに帳簿を積み重ねて何をか取調ぶる折しも給仕の小僧が入り來りていふ「御舍弟が御來訪になりました」雄太郎そのま、見返りもせず差俯いて筆を探りながら、「どっちの方だ、雄二か雄三郎か」「はい、雄三郎様で御坐います」「ちよつ困つたな、雄二郎なら兎も角、彼奴が今ごろ何の用、あるもんか、あの暢氣もン奴、また例の駄法螺でも吹きに來をツたんだらう、今この通り忙しい最中だから、談話があるなら家へ歸つて聞くと、さう言つて追ひ拂へ、決して通す事ならんぞ」いひつ、何心なく筆を止めて見返れば、南無三寶、はや雄三郎は無遠慮に入り來つて給仕の背後に立ちぬ「兄様、ひどいですな、雄二なら兎も角、彼奴がツて、あの暢氣もン奴また駄法螺を吹きに來をツたなンぞア、いよく手嚴しい、私

だつて法螺ばかり吹きやアしませんよ、は、は、は、つかくつと差寄つて傍の椅子に腰うちかけながら、「おい給仕、茶を持って来い」

さすがの兄も何とやら不意を打たれし心地して、おもはず苦笑ひしながら、「兄弟だから無遠慮にいふのさ、しかし斯うして事務を執つてる最中に、づかづか来られちやア困るよ、用といふなア全體何の用だ、家へ歸つてからにすれば宜いに」さう厄病神のやうにいふもンぢやアありませんよ、家で済むくらゐなら誰が来ますもンか、こんな糞面倒なところへ、第一、銀行事務なつていふもなア俗中の最も俗なるもので、殆ど人事中の乾燥無味、まづ五體に血の氣の多い人間に出来ない仕事ですな、いはゆる飯を喰ふ算盤珠と一般、は、は、は、失敬々々時に兄様、私かね、肉身の弟たる雄三郎が正に家の繼承者たるべき嫡子の貴方に、折入つて一事の願望があるんです、きいて下さいますか、その以前ちよいと斷つて置きますが、今日

こゝへ来た雄三郎は平生の雄三郎と聊か違つて居りますよ、よろしいか、言を換へていは、平生の雄三郎は假面で、今日の雄三郎が全くの本領です、その本領の雄三郎が、「何だよ、べらくと、川があるなら早く言つて歸るが宜い、わからないか執務中だ」「執務中は承知して居ますさ、まさか貴方が銀行で藝者をあけてるとも思ひませんからな」「馬鹿、また馬鹿な事をいふよ、戯談ぢやアない、第一が行員の手前もあるに馬鹿な」「馬鹿々々つてさう馬鹿ついでに、しかし、なるほど貴方の目からは馬鹿に見えませうな、よろしい、ちやア馬鹿、ところで兄様、この馬鹿がね、あらためて大に馬鹿ならざる事で来たんですが、きいて下さいな」「え、勝手にしろ、知らない、希願があるなら親父に言ふが宜い」

をりしも給仕が持ち来りし茶碗を手にとつて、ぐつと呑み乾しながら、なほ足らいでや兄の分をも其ま、取つて一口に飲みつ、「は、は、は、さう逆鱗ましくちやア困りますな、子が父

に言ふくらゐなら、何も弟が兄に頼む必要はないんです、しかし勝手にしろ、知らないと言はれちやア取附く島もなし、はッはッ、あ、金が三四千圓ほしいな、たッた三四千圓だ、荷も澤田家の子息が僅五千圓たらずの金に窮するなんて、實に馬鹿々々しい、誰か三四千圓くれないか知らん」「えッ喧しい静にしろ」ところが奈何せん、静に出来ない理由があつて斯く騒々しいんです、嗚呼、欲しいぞ欲しいぞ、三千圓でも宜い、もし三千圓が不可ないなら二千五百圓、え、思ひきつて二千圓に負ける、二千圓々々、百圓札が二十枚だ、しかし此處で、いくら祈つても降りさうな雲行でないから、ちよッ、いッそ獨力で拵へてやらうか、む、さうだ、あとの始末は誰かしてくるだらう、まさか法律に觸れないからな、大行は細謹を願みすだ、えッ、やッつける」そのまゝ、起つて足早に立出でんとせしかば、兄の雄太郎おもはず頭を擡けて、「おい雄三郎、さて、待てといふに、待たんか、こら雄三郎」

其八

元來が人に過ぎたる才氣あつて、加之も度胸の太きが上に、無頓著と無遠慮に生れつゝいたる奴、まして年は若し物に對うて何の容赦もなき剛情我慢の徹ものが、まさか法律に觸れまいとて思切つたる顔色に立去らんとする體、いかなる事を仕出來すやらと兄の雄太郎、はッと驚いて俄かに呼び戻せば、やうく立歸つて、不平滿々たる面を臨らしながら「何か用ですか」

兄は筆を擱き椅子を向け直して、その顔じつと見詰めつ、「用ですかちやアない、全體どこへ行く覺悟だ、金が欲しいくッつて、三千圓の四千圓のと、な、なんにする金だ」「ちやアその金を下さいますか」「やる遣らないは兎も角」「いや、その兎も角が大に宜しくない、その兎も角を聞くくらゐなら私の一料簡で、やッつけます」「やッつけるたア何を」「何をッて、三

千圓なり四千圓なり、欲しいだけの金を自分の一料簡で拵へるんです、獨力獨行」「そ、それを尋ねるのだ、どこで、どうして作るか、そしてまた何の用に使ふんだか」「そりやア兄様、意志と言語の作用が聊か間違つて居ますよ、逆も出来ないなら仕方がありませんが、やれば直ぐ出来る自分の貴方が、頭から私の要求、要求といふなア少々失禮かも知れませんが、まづ願を頭から跳附けて置いて」「え、また、そんな理窟をいふよ、へぼ理窟を」「へぼ理窟」「へぼ理窟ぢやアないか、兄に對つて依頼する弟の汝だらう、その弟が依頼の筋道を頼まれる兄が委細に聞くのだ、それを言はずに我ま、勝手の文句を並べて喧嘩腰になる奴、へぼ理窟さ、當然の理窟ではない、へぼ理窟だ」「よろしい、ぢやアへぼ理窟にして置ませう、ところでへぼ理窟の弟ですから、もはや何にも申しません、言ひませんよ」「言はなきやア言はないで宜い、しかし其ま、何處へも遣らないよ、今日は是非とも同伴に家へ連れて歸つて、篤と親父

にも相談する事があるから」「へエ」「へエどころか今汝こ、を起ちがけに何と言つた、まさか法律に觸れまいッて」「なるほど、たしかに言ひました、まさか法律に觸れまいと」「さ、そこだ、まだ部屋住の身で居ながら、突然、三千圓以上の必要に迫るのみか、その理由を言へといふや否、まさか法律に、これ雄三郎、いやしくも今日、法律に觸れまいといふ言葉は全體どんな言葉だと思つてる、けしからん奴だ」「どんな言葉ツて、まづ道徳上よりは聊か疚しいが、別段、法律に抵觸するほどの大事でもあるまいといふ意味です」「や、呆れ返つた、それほど分つて居りやア猶更だ、どこへも行く事はならんぞいかに取つて押へて組伏せればとて、飛ぶといへば地獄の釜の上をも一足飛に飛去るべきほどの奴が、ふしぎや今の一言に恐れ入つて神妙に無言の體、兄の雄太郎いよく訝しく、帳簿に筆とりながら眉を擧めて、をりく横目づかひに見遣れば、椅子に腰おちつけて兩腕を組みつ、うとくと唾氣を催す風

情、そつと此間に電話をかけて迎ひの者を呼ばんと立ちかゝれば、忽然くわつと鷹の如く光れる目を開いて「もう御歸りですか、ぢやア御同伴に」「なアに、まだ時間でないから、も暫しそこに待つて居るんだ、しかし平生にない俄に柔順しいこつたな」「は、は、は、實際これが私の本色ですよ」「うそ言へ、横著物の」「横著物、よろしい、ところで今日、貴方が私を罵つた言葉を数へると、彼奴といはれたのを冒頭として、あの暢氣もン奴が其次で、馬鹿が續いて三度、へば理窟が折重つて四度、それから呆れ返つた、けしからん奴、今の横著物めを合して以上こゝに十二度の罵詈雑言を頂戴いたしましたな」いひつゝ、兄が喫みさして傍に置けるマニラの葉巻を其ま、無遠慮に取るや否、ばつと天井に吐出す薄紫の煙の中より横著物の面體つきいだして笑を含めば、兄の雄太郎おもはず目を敬て、何をか恐るゝが如くに見返りぬ、

其九

突然 銀行へ押かけ來りて何の仔細もいはず、たゞだしぬけに四千圓もしくは三千圓の必要ありと迫りし體、いかにも怪しければ、ともかくも家に連歸らんと其ま、引止めて眼前の急用を果すや否、午後三時ごろ、兄弟もろとも前後に車を聯ねて立出でしが、兄の雄太郎は自用車にて先に立ち、弟の雄三郎は銀行出入の帳場車にて其後に従ひつゝ、をりくゝ兄が車上より振り返りて氣をつけしに、いつしか途中の混雑に紛れて見失ひぬ、されど待てといへば待たんとて、一時間あまりも其まゝに待合しつゝ、車をも前後に連ねて立出でしほどなれば、いづれ必ず歸り來るべし、もし家に歸りて父に言はるゝが嫌さに遁げんと思はゞ、元來の横著物、この兄一人を何の絲瓜とも心得ざる奴のこと、なか／＼あれまで神妙に待合すべき筈なし、さては例の氣まぐれどの、途中より何事か俄かに思ひ出して岐路へ外れしならんと、ありし委細を父に語れば、父の雄藏また眉を擧めながら旋風の吹いて通

るやうなる彼奴が何の仔細も委曲もあるものか、たゞ徒らに兄を驚かして悪巫山戯せしならんと雄太郎を慰めつ、其まゝに打過ぎしが、さて夜に入りても歸り來らず、十時、十一時、十二時、果は空しく其夜を明しぬ、
うまれついて殆ど狂氣同様、何事も唯おのれが心のまゝの傍若無人に振舞へども、二十歳の今日まで、夜は一夜も餘所に明せし事なき奴が、前夜いよく歸り來らざりしに、きのふ兄へ迫りし時の勢ひと思ひ合して俄かに訝かしく、まさか法律に觸れまいとの一言、また今更の如く驚いて騒ぎ立てつ、まづ第一に彼を乗せし帳場の車夫を呼附けて問へば、銀行をいでて三四町も來りしころ、急に忘れ物ありとて再び銀行へ馳戻らせ、もはや其まゝ、車の用なしと謝絶られたるよし、さらはとて銀行の者に聞けば、なるほど一度は立歸られしが、また忽然いづれへか出で行かれしといふ、

さては猶更ら以て捨て置かれず、あの無法者めが何をすることも知れずと、平生より彼が知己の諸方を問合せしかど、さらに見えず來らずといふに、今は一家の騒動となりつ、果は竊に袖の下を使つて警察の探偵にまで手を廻しぬ、
亂暴は亂暴、横著は横著、現在の親さへ兄さへ小面憎く思ふ事は屢々あれども、これまで金錢に就いての卑しき所爲は更になく、また今日この家に生れて物の不自由あるべき筈もなくしかも今年やうく二十歳の部屋住で居ながら、突然こゝに三四千圓の必要ありと迫りし仔細、かつ其仔細を兄と争うて言はざりしほどの事、そもく彼が身に取つて如何なる秘密の大事か起りしならん、父に似て酒は大の嫌ひなり、我まゝに生れて氣の合ふ友達はなし、人に向うて喧嘩口論こそすれ、人に謀られて甘言に乗せらる、奴でなし、はつと大荒に荒廻る武骨者、ゆめにも女狂ひのあるべき風情さらくなきにと、一家うち寄りて額を鳩めつ、談合

せしかど、一切すべて雲を掴むが如き穿鑿、彼が居室に入りて隅々まで取調べしかど常に變りし體もなかりしが、ふと心附くものありて、新舊二臺のうち近ごろ求めし自轉車なきを訝りつ、もしやと其賣店に問合せば、果して行方しれずなりし一日前に代價の三割引百七十五圓にて買戻せしといふ、

さては其百七十五圓こそ彼が羽翼となりて、いづれへか飛び行きしに極つたり、兄に迫りし三千圓は固より出来ぬを承知の上の萬一を覘ひしもの、もはや東京に居るまじとて、京都大阪名古屋神戸より馬關門司の果まで、いちく澤田家の縁故あるべき諸方へ電報もて問合せしかど、これまた悉く來らずとの返電に、いつしか十日あまりを空しく過しぬ、

其十

あの雄三郎めは毒となるか薬となるか鬼か佛か黑白方圓、さらに行末の正體しれざる難物

ながら、まづ二人の兄が我子として相應に生れついたらば、三人のうち末の一人ぐらゐは化物でも仕方なしとて、常には殆ど捨物同然に笑へども、人しれぬ内心に祕密のメートルを備へて具さに考へつ、どこやら一節おもしろき奴と見込みし其の雄三郎が、俄に出奔して行方しれずとなりしかば、父の雄藏おもはず腸を割くの心地しながら、平生の口もあり二人の兄が手前もありと、わざと驚かざる體を粧ひつ、その實は日夜しきりに手を廻して八方を探り求めぬ、

されど其後さらに何の手がかりもなく、こゝに空しく半月を過して、親心、あれほどの男も身の瘦せ見ゆるかと怪まる、折しも、數ふれば出奔してより二十一日目の朝、届きし一封の郵書は正しく彼が筆なり、

父の雄藏、もる手も遅しと封を切つて讀み下せば、その天性と等しき磊落不羈の筆勢、宛が

ら眼前その聲を聴くが如き中に、また一種なとなう流石に細かき涙の雫ありけり、
拜白

子として親に呈すべき古來の常例文句、かの海岳なほ及ばざる御高恩云々の儀は今更ら改
めて私には過分の父上を持ち候のみか、過分の兄二人まで御坐候今日、不肖の雄三郎みだ
りに其幸福を犯して徒らに父兄の餘力を仰ぎ候事いかにも勿體なく、また一つには既に作
られたる富に甘んじて悠々たる豪華の生活いたし候ことは何となく面白からず心得候故、
聊か世間の風浪に向うて獨力自營の小舟一艘こゝに澤田家といふ安全の港を漕ぎ出し候、
右の委細も申上げず無斷に出奔いたし候事、實に不孝の段々を重ねし次第に御坐候へども
其間の消息は他日具さに御詫び可仕候、
わざと三年間は御左右も御伺ひ不申上候間、御老體いよく御壯健に朝夕の萬福を蔭なが

ら奉祈候

銀行の兄上に一時も早く相當の妻女を迎へて御安心下されたく、次の兄上も聽て御力に相
成候事と思へば今更ら以て雄三郎が從來の我ま、なる振舞ひ恐縮千萬に存じ候
母上には別して重々の御心配を相かけ候、私の一身せめて三年以後には御心に叶ひ候ほ
どの御土産を持参いたすべき覺悟に御坐候間、今日の處は何卒、たいく御ゆるし下さる
べきやう御取倣し願ひ上げ候

雄三郎

父上様

この一書は封筒の消印に御坐候通り大阪にて投函いたし候、不肖の私をも定めて御心にか
けられ出奔以後の有難き御手数も嘸かしの恐察いたし候へども、前文に申上げ候通りの心

當世三人兄弟

底に御坐候間、三年間は何卒このまゝに御打捨置き下されたく、御さがし下されざるこそ却て今日の御恩と奉存候。

數十萬の財を一時に失ひし急電に接するとも、平然として紙屑籠の反故一枚を見るに等しく、そのまゝ、軽く抛けて空嘯くべきほどの澤田雄藏ながら、今こゝに我子の一書を読んで思はず、两眼をしばた、きぬ、さても親心。

其十一

目をむいて働くべき關西の檜舞臺、天晴れ商賣の太刀打には大阪の目貫ともいふべき心齋橋の通り筋に、間口やうく、五間ながら主人の心と共に奥行の知れざる一商店、家號は東屋とて日本流の古風なれど、家業は新らしき流行を追ひし西洋小間物と舶來煙草一切、これも英米より殊更に東洋向とて輸入し來れる一種の藥臭き煙草は置かず、いづれも埃及、土耳其

耳、露西亞、さては馬尼拉の葉卷のみを賣捌きつ、片手の小間物類も力めて佛國の新意匠に後れざるとの噂さ高く、いつしか紳士淑女の間に、殆ど競争の如く東屋の名を唄はれて誇りぬ。

この東屋は、主人夫婦は固より下女丁稚に至るまで悉く關東ものを用ひて、大阪人といへば無給金で骨を粉にして働くとも大の禁物といふ、その仔細を聞けば外でなし、東京にて上方言葉が珍らしく耳立つと一般、この大阪の中央に一家すべて悉く生粹の東京辯は取も直さず生きた商標同然、お、あの江戸ツ子屋はんだすかといはる、が既に我家のレッテルなりと鼻をひこつかせど、なアに其實は萬事の勝手が悪いからだと笑ひぬ。

されど東屋と稱して一家こゝに悉く東京人間なることは、人の目にも耳にも早く入り易きのみか、いはゆる土人形然として無愛敬なる大阪の小店者とは雲泥の世辭を振擻いて、來るほど

の客を外さず、資本入らずの口車に乗せて怪我なきやうに送り歸せば、自然に店の繁昌を添へて、どうやら兩隣家を買潰さんとの勢ひになりぬ、

主人は今年五十あまり、ぶつてりと肥え太りて苦味走つた男振、しかも目鼻の間に深い思案のありさうなる苦勞人の果てと覺しく、女房は四十一の半婆、もう貴方いけませんといへど、元來が美人にて、打見たるところは三十前後の大年増、洗ひ出しの薩摩杉ともいふべき體に、くつきりと垢ぬけのせし意氣肌どこやら昔とつた杵柄の餘波を止めて、いかな大晦日の見倒し屋に踏ませてでも必ず妓者の果と指すべき風情、さては柳橋か新橋か、まさかには赤阪神樂阪のお安い末流にもあらざるべく、夫婦が間に秘藏娘たゞ一人、ことし十七といへば人を取て喰ふ鬼でも蛇でも角を隠して風姿つくるべき筈を、まして親父が贅澤に育てられ母親が腕に覺えの自慢に仕立てあけられ、本尊しかも凄しいほどの尤物、丸裸に簾を着せて大道の辻を四

つ這ひに這はすとも、恐らく南北の色香を誇る花柳にもあるまじといふ美人に生れて、天生の優しい中に凛とせし東京仕込の評判物、あの身代にあの娘をつけて跡とる奴は、畜生いかなる浮世の冥加ものかと、まだ有りもせぬ前より親の敵を覗ふが如く騒ぎ立てぬ、さればこの娘の婿になるべき男は生命がけ、うかく闇の夜の獨り歩行、出来まいとて笑ふものさへありけり、

親子三人の外には、座敷に召使ふ下女二人と飯炊の女一人、店には四十前後の番頭これを旗頭として手代分四人、丁稚小僧が五人、以上主従あはして十六人、いづれも東京うまれの一家結合、さらに他國の人間を交へねば、朝夕の言葉より衣服萬端の習慣まで、おのづから別に一流を立て、睦まじ氣に働きぬ、

其十二

あした、そないな事したら、いけまへんがな、あほらしいといふ大阪の中央に、まッびら御免なさい、お互ひ様に商賣のこッてすからと、一切すべて東京風の一流、かの東屋へ二年越の出入して、心の正直と脚の達者と萬事の手堅いところを見込まれつ、をりくは例の秘藏娘を一人で乗せて出すほどに使はる、車夫が身元引受けての口入に、これも東京者の流れ込みとて近ごろ奉公に住込みし男は、かの澤田家の雄三郎、時には馬車を驅り自轉車を走らせて貴公子にも譲らざりし風體がらりと打ッて變りし、雙子の袷に小倉の角帯、紺木綿の前垂れに雪駄ちやらく、身の動作より言葉の端までも改めつ、どう見ても氣の利いたる商家の若手代なりける、

一念かうと思ひ詰めては大地の土に喰ひ付いても石を噛み割ッても、やるだけの事を仕遂けずば置かぬ氣の雄三郎、こゝに飄然として百萬以上の生家を冷飯草履の如く脱捨てながら、この大阪に流れ来て艱難辛苦は覺悟の前、いろはより身を起して獨力獨行に這上らんと一心を極め、さる仔細あッて幸ひ東屋へ出入の車夫を請人に頼みつ、まづ當分は店の旗頭たる番頭の指圖次第、丁稚小僧の上座となり手代の末席に連りて、其間に自己が爪牙を深く包みながら一牛懸命に身も骨も惜まず立働さぬ、

亂暴と横著と無遠慮と無頓著を斷切ッて除けば、あますところは目より鼻へ一文字に脱け出すが如き雄三郎、まして腹の底には百鍊の鐵板をも貫くべき膽魂を包んで、身は二十年來の上流に育ちしかば、自然とことなう卑しからずして、何とやら年にも似ざる貫目を備ふる體、手代の失策を見出す番頭の眼力に及ばず丁稚小僧を追廻す手代の目には届かねども、流石は浮世の苦勞を仕盡したる主人は心中に早くも不審を起しつ、此奴たゞの鼠であるまじと、萬事につけて猶更ら見れば見るほど果して鷄群の一鶴、善玉か惡玉か知らねど面白き奴を置

當てたりと、一入さらに引立て、手許の用にまで召使ひぬ。
 女房は女房、また浮世の裏道を通りぬけたる腫の底より、朝夕じつと目星をつけて思ふやう、およそ大坂にはあるまじき高價の舶來品を扱はせても左のみの大切とも思はざる風情。いかな大金を見ても目遣ひの常に變らぬ平氣の様子、三度の食に對うても悠々として急かす慌てず、店の朋輩と語る時の愛敬あつて加之も下卑ざる振舞、また馴染も淺き我等主人へ言葉づかひの一點うてたる顔色なく物に怯ぢ恐る、氣配さらになく、外貌は岩疊づくりの骨格ながら、あの木綿著物の身に似合はざるところありて、色は白からねど第一あの皮肉の艶は慥かに菜葉生育の下種ならぬ證據、力ありけに手足は丈夫なれど其割合に指頭の細く軟か瓜の薄き鹽梅といひ、こりや腹からの奉公人でなく、いづれ長たらしい筋目か筋條のあるべき筈、世には白むくでツかの諺、油斷大敵ぞと思はず娘の方を見返りぬ。

されど本人の雄三郎が心中には、ひツくるめて竈の下の灰まで金にするとも、高が小賣店の端た身代に何の目糞もかくべきや、なるほど主人夫婦は世間なみくの商人に較べてこそ聊か毛の生えたる所もあれ、そもく我目よりは衣食住に差支なきだけの活動もの、また秘藏の一人娘が稀なる美人にせよ優しいにせよ、火打箱に等しき一家を天地として無教育同然に育ちたる小女郎一疋、をかしう變に用心するほど猶更ら小癩なり、何の氣も心もあるべきや、わざと綿を捨て、襦袢に身を落せし我本領は別にありとぞ笑ひぬ。

其十三

澤田家の三男、かの雄三郎が名さへ雄吉といふ奉公人に改めて東屋へ住み込みしより、およそ二月あまりのうちに商品の一切を丸呑にして、いちく元價と賣價と其間の客に接する臨機應變の掛引まで悉く手に入れしのみか、第一の舶來商に必要な英佛兩用の目を備へしか

ば、忽ち十年旗頭の番頭に一泡ふかせ、數年物馴れたる手代どもを踏抜いて、何事も分らぬ素
丁稚にさへ重く見られながら元來の横著と大膽とを深く包んで萬事の働らきに慇懃を盡しつ
つ、をりく酒々として罪にもならぬ滑稽に人を驚かすなど、糞中の錐は自然に其鋒を現は
すの比喩、いよく尋常ものならじと主人夫婦に目指されぬ、

一日の夕方、いづこよりか主人が電話にて至急の商用あれば雄吉に出よとのこと、雄吉その
ま、電話口に走せ行きて聞けば「雄吉か、ちやア汝ね、すぐ来てくれ、乃公は去る處に居る
ンだがね、それを今いふにも及ばないから、南の千日前に法善寺といふ寺がある、その寺の
西門に車を待たしてあるから、その車に乗りさいすりやア乃公の居る處が直ぐに分るよ、何
その車夫は平生の奴だ、そら汝の引受人だから、しかし家内のものが尋ねたら、商用で北の
吉川商會から掛けたんだと、さう言へ、いか、わかつたか、内證だよ、内分だぜ、すこ

し理由があるんだ」「はい、はい、はい、承知いたしました、はい、なるほど、ちやア何で御坐
いますね、今、神戸から取引の英人が来て、へエなるほど、つまり私が通辯にまゐるんです
な、よろしう御坐います」「此奴め、なか／＼うまい事をいふ、誰か傍で聞いてるとみえるな」
「はい、さやう、うまい事は言へませんが、どうか斯うか誤魔化しますから、はい承知いたし
ました、すぐまゐります、ついでには何か、店の品で持つてゆくものは御坐いませんか、見本
に」「いよく／＼けしからんぞ、しかし、わかッたら早く来い」「はい、さやうなら」

折しも電話口の此方に何心なく佇みし女房、主人の言葉は知らねど雄吉が返答いち／＼聞き
取ツて、御苦勞だね、神戸から取引の外國人が来て、さうかへ、汝が通辯に、ちやアちよいと著
物を著替へて、車に乗ツておいでよ、おや、まだ夕飯が済まないんだね」「なアに貴女、車なん
か入りますものか向脛に馬の字を書いて驢出しやア直ぐで御坐います、夕飯は歸ツてから藏

きませう」だつて、お腹が空いちやアいけないよ、それとも途中で何か食べておいでよ」「め
ツさうな事を、一度ぐらゐる遅くなつたつて大丈夫、平生の下種ッ腹に食溜めて御坐いますから
は、、、、、」「ほ、、、、、そんな眞面目な顔をして、をりくよく愚談を、これ常や、奥
にある妾の財布を持つて来な」「ど、何う致しまして、いたゞくもんなら店番頭さんに願ひ
ますから、おい常どン、入らないよ、それよりやア私の歸る時分、御最眞ぶりに今夜の惣菜を
宜いか、どツさりね」其ま、店を飛出して心齋橋を南に渡りながら、どうも變だ、自分の居
處は言はないで、わざと車を法善寺の裏門に待たすな、をかしいこつた、内證だ内分だ
と二度も繰返して、いよく變だわい、こりやア殊によると、おしろい臭い隠れ場所だな、
しかしその秘密の穴へ新參の乃公を内分で呼附けるたア、ふむ、彼奴なかく喰へない老
爺だからな、もし乃公の身分を知つたのぢやアあるまいか、それにしても呼出しやうが變だ、
え、ま、よ、どこでもかでも構ふもんか、時と場合によりやア此方から倒まに撫で上げてや
らう、

其十四

法善寺の裏門に待ち受けし車夫、雄吉の顔を見るより委細もいはず其ま、乗せて曳出せしが
何事ぞ僅か三町たらずのうち、はや此處ぞと、門口に下せば、内より二十三四の女が愛敬な
れくしけに出で迎へて導きぬ、
間はずとも知れたる家の構へ、迎へし女に導かれて中庭の片廊下を傳ひつ、奥まりたる
一室の此方まで進めば、はや香粉の匂ひ鼻をついて笑ひさゞめく聲、案内の女まづ襖をあけ
て、おいでやしたといへば、正面の床柱に脊を持たせて左右に物いふ花を居並べつ、「やア
よく来た、さア此方へ這入るが宜い、こゝは女房や娘の手前、店の奴等にやア猶更以て極々

が過ぎると身の毒だぜ、あ、厄介な女等だ、いろんな世話まで焼かしやアがるわい、仕方がね
エ、年の役目だ、は、は、は、は、

藝妓どもが立去りしあとには主従たゞ二人「さアこれでよし、時に今日、わざ／＼こんな處
へ呼寄せるにも足りないがね、幸ひ、先刻まで同商賣のもの三四人と飲んで居た取残されの
落武者だ」「へエ、して御用は」「御用ッて、別段これといふ用もないがね、少々あらためて、
汝に、き、たい事があるのさ」「如何やうなコッて御坐います」「外でもない、全體、汝は東京
の何處だい」「何處ッて、御存じの筈ですが」「そりやア始め奉公に來た時、あの請人の車夫か
ら聞いて、麻布の市兵衛町とかで兩親も兄弟もなくなつた孤獨者といふこたア聞いて居るが、
實際さうぢやアあるまい」「いや、全くで御坐います、兩親は早く亡くなりました、たつた一
人の兄が僅の手内職で、やう／＼兄弟二人が暮して居りましたところ、その兄も不幸にして

去年の夏、あとに私が何とも致しやうなく、家は勿論借屋のこッて、ぼろ世帯の道具を賣拂
ひました金子やう／＼二百圓ばかり、そこで半年ほど下宿屋住居のうち、一番この上方へと
志し商賣の見習を目的にまゐりましたもの、どこに縁も蔓もない身で、まづ見物かたが
た、ふと道頓堀で乗りましたのが、あの車夫、いろ／＼大阪の景況など尋ねましたところか
ら、つい言葉が重ッて、それが縁の端、幸ひ御家の事など承りまして、無論、見ず知らず
の私を引受けてくれますから、まづ擔保同様に、其時、持合せの金を七十圓だけ、車夫に預
けて御坐いますから、お調べ下さいますりやア直ぐ分ります」「いや、それで分つた、よく言
葉の筋道は分つたがね、少々なほ不審の點があるから念のため、一應、東京を調べて見るよ、た
とひ目下は家がないにしろ、麻布市兵衛町に住んで居たといやア、すぐ分る方法があるから、
それは先づ其事として、時に酒を飲まないか、酒が嫌なら、何か別に食ふものを取ッてやらうし

其十五

固より口から出まかせの方便、たゞ一時の身元引受料として持合せの七十圓を例の車夫に與へたるは眞實ながら、今こゝに突然、さらば東京麻布の市兵衛町を問合さんといひし言葉に、さすがの雄三郎ぎよツとして驚きぬ。

されどまた、つらく思ふに、唯これだけの詮議ならば何處にても済むべきに、わざ／＼おのれが祕密の場所に我を招きしのみか、家内のものには一切すべて内證と念を押しての電話、眼前また我を遇するに打解けて萬事の隔心なき體、さては追出さんためならず、却て何をか我に見込をつけしたため、あらためて釘を打込むならん、え、ま、よ、一番こつちから割ツてみると、はやくも臍を固めて膝を進めぬ。

「え、只今、あゝは申上げましたもんの、その實は悉皆、うそで御坐います」いひつゝ、額越

に見上ぐれば、さのみ驚いたる顔色もなく、たゞ靜に首肯いて葉卷の灰ばツと小指に彈き落しつゝ、「虚言だらう、どうも虚言らしかつたよ、しかし、今更ら平氣で、ありやア虚偽で御坐いますと切出したところは面白い、ぢやアあらためて實際の素性、といふのも大層だが、まづ一通りの身分だけ聞かうかね」「なるほど、随分うちあけて申上げも致しませうが、もし私が、この雄吉が、日本一の大金持の子であつたら何となさいます、また穢多か乞食の子であつたら何う遊ばします、勿論、前科などといふ人間にあるまじき罪惡の點は別問題として」「ふむ、いや日本一の豪商の子でも乞食の子でも、そんな事は構はない、乃公は乃公の見込をつけた以上、あくまで使ひもしようし、また事によれば奉公人としても置かないほどに思つてるかね」「有難う御坐います、この私を、まだ何の御役にも立たない新參の雄吉を、それほどまでに思召し下さいますとは、實に、身にあまりました御言葉、では御坐い

ますが、こゝ、斬時せめて一年か一年半の間、たゞ御覽通りの不束者として、どうか此ま、
 「いよく、面白いが、さて物は隠されるほど猶更ら聞きたいのが人情さ、しかし、それほど、思
 ひきつて言ふからは、今こゝで叩き出すとしても打明けまいから、乃公も男だ、もう尋ねまい、
 よし、ぢやア鬼の子でも蛇の種でも、さしあたる汝を見込んで使はう、時に、汝の目的は」「全
 くの御大量恐れ入ります、つきまして私の目的、これも一年か一年半の間」「む、それも言
 はないといふのか」「昔と違つて、今日のこつて御坐いますから、すぐ分る筈の身分も此ま、
 また奉公人として主人に問はれた目的も申上げぬといふ不埒千萬の奴、いよく、不思議に、
 怪しく思召しませうが、假令どんなことがあつても、御恩を仇で返するやうな私で御坐いませ
 ンから」「よし、ぢやア何事も問はない、つまり捨子を拾ひあけて今日まで育てた心持で居よ
 う、は、は、は、しかし萬事が、この通りの大さつばいでやつけて来たから、この白髪まじり

になつても頭かあがらないのさ、乃公もね、汝の年頃にやア随分、人にも負けない料簡で、い
 ろんな太い藝もしたもものさ、根からの小賣商人ぢやアないからね」「いや、御言葉承つて
 申上げるんぢやア御坐いませんが、私も、實は、さうかと存じました、なるほど今の御商賣も
 結構では御坐いますが、つまり御人體に較べちやア聊か舞臺が小さいかと、へエ」「おもしろ
 い、さう見たか、さう見えたか」「どう致しまして、青二歳の私風情が見るなんて、見たんぢや
 ア御坐いません、自然に見えたので御坐います」「は、は、は、うまい、うまい事をいふね、
 ちやアまた、いつか打解けて談さう、今日は此ま、時に夕飯がまだ済むまい、さア何か注
 文するが宜い、家ぢやアまさか汝一人に別の菜をつけることも出来ないから」「有難う御坐い
 ます、しかし私は、これで御免蒙ります」「まア宜いぢやアないか、今に何か御馳走が出るよ
 「いたゞきましたも同然、やはり御店へ歸つて皆と同伴に喰べませんと却て」「は、は、は、

それもさうだが、そかア何とか誤魔化すさ、まさか五間まぐちの店先を天地として年中うご
く動いてる奴等や乃公の喉ア一人ぐらゐを誤魔化し損ねる汝ちやアあるまい、は、は、は、
「ヘエ」「何、ヘエなもンか、鏡を出して見ろ、その目のくり玉が違ッてるぜ、たゞの青二歳
たア」「は、は、は、御戯談を」

其十六

忽ち眼前に濟むべき些細の事にも、印紙貼用の證文取交して睨み合ふ世の中に、これはまた
主従ともに毛色の變りし一癖同士、召使はる、奉公人の身として自己が素性を語らず、召使
ふ主人の身として一切これを咎めず、互ひに言はず語らずして其間さらに何の隔意もなきの
みか、さても其後いよく心を合して内外一致の活動に寸隙なければ、およそ半年も過ぎし
ころは東屋に雄吉といへる手代の逸物ありと人にも知られ、どこから探し出したか近來の掘

出物とて、同じ商賣の仲間にまで羨まれたつ、果は誰いふとなく尋常の奉公人であるまじと
の風聞に上りぬ、

たゞの奉公人でないとすれば、いはすと知れしこと、きくに及ばず聞けば猶更腹の立つ奴、畜
生いつしかあの評判娘を自由にする横著物かと、おのれが踏んだ犬の糞をばわさく、盛直し
て人にも踏ませてやりたいほどの深切者が、寄ッて群ッて嫉妬の火元をあけしかば、ばツと立
つ炎焔の漆煙おのづから東屋の店頭をかすめて、實は内心こればかりを目的に多年の忠勤を
勵みし手代どもが親の首を取られし如くに騒ぎ出しつ、果は奥にも聞えて本尊の娘が耳へ
も入りぬ、

今日も例の如く主人より直接の内用を帯びて、いづれかへ雄吉の出で行きしあとに、流石は
商賣柄の巻煙草、ばツくと身分不相應に吹出しながら、煙の中に額を鳩め面を膨らし聲を

潜めつ、「どうだい、彼奴が此ごろの勢は、随分と凄まじいもんだぜ、うぬが一人で當店を切つて廻すやうな大面をしやアがつて、第一、うちの目的も分らないや、あとから来た新参者を何のこつたい、あんなに大騒ぎしてさ、馬鹿々々しいぢやアないか、前々から勤めてる我々がよ」「馬鹿々々しいといやア、例の風聞ね、うかくすると本物になるぜ」「かも知れないね、近ごろの様子ぢやア、萬事まるで奉公人と見えないもの、おい雄吉、やれ雄吉、雄吉雄吉つて、それほど彼奴が御大層なら、つまり我々は入らないものさ、いッそ此ごろ流行るストライキをやつつけてやらうか、一切すべて江戸ッ子ばかりを一流に賣出した店だから猶更徹へるぜ、大阪の中央だア、おいそれと東京の人間が手廻らないからな」「そりやア随分、やつけるも宜いがね、まづ肝要の本尊様アどうだらう」「どうつて何がよ」「まぬけだなア此奴は、それだから、あんな野郎に踏み潰されるンた、本尊の御意は如何だらうといふのさ」「まぬけ、

まぬけたア何だ」「何だも彼ンだもあるものか唐變木め」「唐變木」「唐變木が分らなきやア兵六玉さ」「兵六玉、ひどい事をいふね兵六玉たア」「おいくさう内輪喧嘩を仕ちやアいけない、よく今の内に話し合つてさ、何とか相談をして仕舞はうぢやアないか、つまらない、わざく東京から上方まで引張られて来てさ、もう今年で六年だらう、其間、一生懸命に働いた我々が、きのふ今日まぐれ込んだ河童野郎に尻の穴の血を吸はる、なんざア、あんまり意氣地が無さ過ぎるからな」「そりやアさうだがね、今いふ通り第一あの本尊の思召を確めたいもんだ、實際、全く雄吉奴を婿養子に取る氣が取らない氣か、もし嫌でもないといふ不埒千萬な心底なら、どうだ、今こゝで揃つて出る我々が、先方から揃つて叩き出される覺悟で一番、あとの始末のつかないほど掻廻してやらうぢやアないか、それとも第一の本尊が、あの雄吉めに何の思召もなくつてさ、よく世間にある奴だ、たとひ父母の押附業でも、こればかりはといふ

やうな場合が、ないにも限らないぜ、さうなるとまた我々も今こゝで、むかつ腹を立て、折角多年の奉公を空にするも馬鹿けてるからな、どういふ風の吹きまはして、また我々の頭へ天降るかも知れないからね、なんにしても、むづかしいところだ、輕業の口上ちやアないが、千番に一番の兼合ひ、太夫首尾よくまゐりますればといふ場合だから、急ぐまい〜

其十七

新參の雄吉が深くも主人夫婦の氣に叶うて、俄かに重く用ひらるゝのみか、今にも内外一切を委任されんとするの勢、また其身も引受けて切つて廻らんとする目色あるが上に、東屋の身代と娘の容色と天秤にかけて元來どちらが重いか輕いかと評判さるゝほどの美人、その美人の婿養子になるかとの風聞はつと立ちしより、旗頭の番頭は四十の上の女房持にて朝夕こゝに通ふ身なれば別に仔細なけれど、こゝに雄吉と前後を争ふ年輩の手代三人いづれも五體

を電氣にかけられしが如く騒ぎ立て、生涯の浮沈この時にありと、あるだけの智慧袋を絞つて密議を凝せし末、兎も角も先づ本尊の思召を探らんとて竟に一計を案じ出しぬ、

東屋の秘藏娘、その名を玉といへば、名詮自稱、なるほど玉子に目鼻の今年十七まで、九つの歳より八年間その影身に附添ひし下女の菊といへるは、此女また思ひきつて出来損うたる悪女の肥つてふ、こゝに二十五の曉まで横町の牡犬にも尾を振られし事のない女ながら、根が正直一途で加之も浮世馴れて何處やらに呵しみのある飄輕もの、嬢様が御身の極るまで妾は華族から貰ひに来て嫌といひしに、いづれも臥轉んで笑ひつゝ、華族とは面白い、ようも言つたとて東屋一家に華族の奥様お菊の方といふ仇名を取りぬ、

手代ども三人、そつと人しれず眞向梨割の二圓づ、を出して合計六圓の賄賂、別に五十錢づつを合して一圓半の運動費、これにて鬪取に當つたる重吉といふ手代、幸ひ三人のうちの口

達者にて今年二十七、お玉を覗ふに就いても野心勃勃たる先登第一の兵、たくみに例のお菊を誘ひ出して或小料理屋の奥二階へ連れ込みぬ、奥まりたる六疊の小二階に五種六種の料理を取寄せ、銚子を運ぶ女中に銀貨を捻って抛け遣りつ、ねえさン用があれば手を叩くからといふ重吉の顔を、じつと今更小氣味わるけに見詰めて、まんまるの膝を締め大道白の尻もじくさせながら「あらまア重吉どん、妾を、こんな處へ連れて来てさ、内談々々ツて、全體どんな内談があるの、いやですワ」いひつ、鳩胸に手をあて、心配といふ風情、飴細工に似たる頬邊ばつと赤く染め出せば、重吉ぶつと思はず吹出しぬ「あツ、は、は、は、お菊どん、さう俄に改まるもンぢやアないよ、いやに何だか他人行儀をするやうだぜ水臭い」「だツて妾、きまりが悪いもの」「きまりが悪い、きまりが何、悪いもンか」「でも妙ですワ、男一人の前で、妾が女だもの」「女、いや女だ、そりやア

女だよ、女といふことア分ツてるがね、まアさ、よく考へてみるが宜い、いくら和女だツて東京もンだらう」「おや、いくら和女だツてとは重吉どん、ひどいね」「こりやア失敬々々、何さう言ツた理由ぢやアない、和女も東京うまれでさ、この大阪に手近な親類があるといふぢやアなし、あ、して同じ家に奉公すれば、お互ひに朋輩だ、ね、しかも悉く關東もン一色と來て居るから、たいの朋輩よりやアまた一層、格別に縁の深いといふもんだ、ね、ところでお菊どん、この重吉が折入ツて依頼があるのさ、極々の内々で、決して人には言へないこツてね」「おや、おやくいやだよ重吉どん、あら嫌だワ、どうしよう」「なアに、さう困るほどのこツちやアないよ、和女の一料簡で、すぐ出来るこツたから」いひつ、懷中より例の六圓を取り出して、そつとお菊の膝の上に置けば、はつと驚いて十七貫目もある體量を木葉の散るが如く飛退きながら「あれ、こんなものを、欲しかアないよ氣味の悪い」「さう、とけくし

ためならずとて平生は母に叱らるゝ小説本を、そつと内證に讀みかけし折しも、例の菊が襖越に聲をかけぬ、

「お嬢様、まだお寝みなさいませんの、もう遅う御坐いますよ、あんまり夜更しをなさるとそれまた朝の貴嬢」
「い、よ、翌朝は、きつと早く起きるから、なぜか今夜ア急に寝られないんだもの」
「お睡くないんですか、どうして」
「どうもしないがね、何だか寝つかれないの、和女まアお寝よ、構はないで」
「妾も實のところ、今夜は寝つかれませんの、少し心配が御坐いますよ」
「何が心配なの」
「何がッて、貴嬢の事で御坐いますよ」
「おや、妾の、なぜ、菊、なぜだよ」
「なぜでも心配で御坐いますわ」
「その心配の理由を言ッてお聞かせよ、妾の事なら猶更」
「ぢやアお嬢様お枕頭へまるッても宜う御坐いますか、此處と其處では自然に聲が大きうなりますから、また叱られますから」
「それでは早くおいで、そつと小さな聲で談すから」
お菊そ

のま、起き出でて襦衣の上に常の著類を引掛けながら、隔ての襖そつと開けて枕頭に摺寄りぬ、
「御免あそばせ、こんな風俗で」
「あ、宜いとも、しかし何のこつたね」
「何ッて、外でも御坐いませんがね、あのウ貴嬢は、どうせ御養子をお取りなさるんでせう」
「あら菊、いやだよ、そんなことを、だしぬけに」
「い、え貴嬢、それに就きましてね、けしからぬ事が御坐いますの、あの店の重吉ね、彼奴いけない奴で御坐いますよ、妾は腹が立ッて腹が立ッて、くやしクツて」
「おや、どうしたの」
「どうも斯うも御坐いません、あの重吉の才榎野郎め、けしからぬ奴で、まア貴嬢すうくしいぢやア御坐いませんか」
「なんだよ、そんなに」
「そんなにッて貴嬢、あの、ひよつとこ奴、お嬢様の御養子にならうと思ッて居ますの、あんないけすかない奴を貴嬢、お嬢様になさるんなら、この菊は翌日から御暇をいたゞいて東京へ歸りますワ」
「は、は、は、それは戯談だよ、あの重吉が」
「いえ、貴嬢、戯談ぢやア御坐いませんよ、

眞實、眞實も眞實、一牛懸命に目の色を變へて申しましたの、白痴の一徹とやらで、怖いもんで御坐いますよ、あんな奴は」「あら眞實なの、どうして、まアそんな事を和女に」「それが貴嬢、憎いぢやア御坐いませんか、今夜ね、宵の口に、無理やりと妾を變な料理屋へ引張り出してお金を呉れましてさ、そして、貴嬢の事を、畜生、ふざけた奴で御坐います、そツと人の知らないやうに貴嬢を妾に取持てとさ、呆れ返つて物も言はれませんから、黙ッて鼻ツ柱へ喰ひ付いてやらうかと思ひましたが、料理屋の二階でもあるし、却て御家の御名前にかゝることがあつてもと、そのまゝ、睨みつけて、すたく歸りましたの、貴嬢、夜があけたら直ぐ、お父様に言付けてお遣り遊ばせ、あんな奴は、お店の爲にもなりませんよ、キツと悪い事を致しますから」「あれ、いやな重吉だこね、しかし店を出されても可哀さうだから、此まゝにしておやりよ」「それが貴嬢、此まゝにしてやれない事が、まだ御坐いますの」「なんだへし」「あ

の雄吉どんね、あの人を何だか敵のやうに申しますの、いや生意氣だとか、喰へない奴だとか、たゞ置かれないとか、どうしてやるとか、終ひには貴嬢、お店の金を竊盗して、御主人の目を偷んで、こそく色町へ晝遊興に出るなんて、そんな虚偽を言ひますの、誰が貴嬢、眞實に受けましますものか、あの人こそ、ねエお嬢様、陰陽なしに朝夕よく働いて、第一あの萬事に氣の利いた事を御覽なさい、ちツとも嫌みツ氣なしに、さツぱりとしてねエ貴嬢」「おや、さう、重吉が、そんな事を言ッてるの」

其十九

かの重吉が神算鬼謀がらりと外れて、例のお菊に失敗せしより、三人の手代またもや額を鳩めつ、もはや此上は單刀直入に敵手の雄吉を取挫ぐの外なしとぞ謀りぬ、されど彼奴は元來の逸物、なか／＼一筋縄で叶はぬのみか、第一が主人の信用あつて、新參

ながら店の商賣にかけても穴のない奴、しかもお菊の口振をきけば、どうやら世間の噂に違はず、いよく本物になりさうなる様子といひ、かたぐい捨て置くべき奴ならねば、出るか出さる、か一番こゝは度胸を据ゑ、まづ彼奴に熱湯を吞ましてやらんと、互に謀し合して朝夕とも隙を覘ひぬ、

東屋の店則として、月に七日と十八日の兩度を休業日と定め、朝の七時より夜の九時を限りつ、店の小僧に至るまで、いづれも心のまゝに骨休みの例あるを幸ひ、當日に連出して色町に追込み、どつと一同うち揃うて大騒ぎせし後、そつと引揚げて彼奴一人を人質に残し、其ま、家に馳せ歸つて注進するにも、我々三人のうちでは却て面白からず、こゝは小僧のうち一人を手鞠に使用して、主人よりも先づ細君の耳に入れ、豫防のため本尊にも餘所ながら吹込むべき手段ありとて、いづれも片唾を吞んで待ちかけぬ、

折しも四月の七日、時候は春なり、長閑なる空の景色、この建て詰つたる軒と廂の間より見上ぐるさへ胸の開くが如き心地するに、まして市街を離れし野原の眺望いかならん、いざ平生の骨休めに今日は打連れて出でんと、三人の朋輩が前後より手車口車に乗せて勤めしかば、雄吉さのみ心に面白からねど、郷に入つては郷に従ふの諺、同じ店に同じ勤めの奉公人として我た一人その意に反かんは却て面倒なりと、竟に伴はれて何心なく立出でぬ、
うまいぞく、今日こそ畜生、平生の敵討、深い處へ突き落して、とツちめてやらんとの策略、三人いづれも目に物いさせて肩口で笑ひながら「おい雄吉どん、まだ君は大阪を委しく知るまいね、高が一里四方で東京の二區ぐらゐ、あるかなしたがね、随分おもしろい處があるぜ、まづ南の方角では天王寺、天下茶屋、すつと往つて堺の濱よ」「ですがね、まだ日が淺いから、さつぱり分らない、やうく近ごろ方角を覺えたのみさ」「だから今日は、まづ南の野

邊を目的に出たのだがね、まだ時間も早し、さう書狐のやうに田甫ばかりを彷徨いても居られまいから、ちよいと千日邊の雑沓でも見て行かう、つまり淺草の公園さ、しかし道頓堀の景氣と來ちやア、いつ見ても東京にないぜ、あれくらゐ盛な場所は」「さうですねエ、どうも、あすこは別段だ、しかし千日前は、いつでも行かれるから、いッそ、すッど此ま、野ッ原へ出ちやアどうです」「なるほど、それも宜いがね、第一、晝飯に困るよ、ちやアどツか手輕な小料理屋へでも飛込んで、ともかくも腹を拵へた上の事にしよう、ねエ、おい、皆どうだ、贊成しないかよ」「贊成々々、別段これといふ用もないに急いで、ぼか／＼歩行するよりやア、少しでも長く尻を落付けて、こて／＼喰が宜いね、しかし今日は例月大藏省の豫算通り、御規則の一圓づつちやア少々心細いね、誰か別途支出の用意はないかね、どうだ宗徒の面々」「あるとも／＼、この重吉様が引受けた、安心して居るが宜い、大丈夫、もし萬々一、足りな

いやうな事があつても、南の方角なら何處でも直ぐ借りて來るよ、憚りながら大阪へ鎮座まし／＼てから六年以來、外廻り擔當の乃公だ、いくらも取引先の番頭連に親交があるからね」「ちやア一切すべて重公に任せよう、あんまり任しすぎては安心も出來ないがね」「は、は、は、さう安心の出來ないほど委せ過ぎられちやア困るがね、まア宜いさ、どうでもするから」

其二十

萬事かの重吉が音頭取となりて千日前の雑沓を縦横に縫ひつ、また取ツて返して幾度か法善寺を通り抜け、なるべく足を勞らし時刻を費して後、とある小料理屋に押入り、膝と膝とを突合さんばかりの一室に四人ぐるりと車座になつて小酒宴を始めぬ、三人いづれも揃うて飲む奴なれば、例の雄吉は元來の下戸、宛から油に水の交りし如く、た

だ一人苦笑ひして盃を手にも取らざれば、先達の重吉、こゝぞと膝を進めながら「おい雄吉どん、今日は是非とも一杯やツて貰ひたいね、いや、深く飲めないといふこたア常から聞いて居るが、まア一杯や二杯は宜いちやアないか、なアに少しは酔ったツて大丈夫、主人から大びらに出る骨休みでもあるし、また我々三人が附いて居るから如才なく介抱するさね、さア飲んだ、さう一人が眞面目くさツて、ぼつねンとして居ちやア面白くない、どうか是非、かうして同じ店に同じ奉公しての間は互に兄弟同様だアね、ましてこれ百五十里を隔てた土地でさ」
 「いや、ありがたいがね、實際どうも全く、いけないのだから、何、一杯でも飲めるなら斯う義理を缺かないさ、ぢやア酌でもしようかな」「おい、雄吉どん、今、重公がいふ通りだよ、酔ったツて宜いからさ、ちつたア無理にでも、交際に飲むもンさ、さう固くばかりして居られちやア我々が困るから、こりやア願ひだ、どうか一二杯、ねエ」
 「それでは折角だか

ら、一杯、ほんの注ぐ眞似をして貰はう、虚言のやうだが全く酒鹽で酔ふのだからな」「宜いッては、心得てるよ、そら半分ばかり」「や、滾れるといふに、は、は、は、何これが半分なもンか、溢れて外へ出るぢやアないか」「飲む飲まないは俵置いて、酒といふもなア吝な酌やうをするもンぢやないのさ、ところで文句なしに、ぐツと、一口に、一息に、ぐツと」「どうして、これが一口なんて、餡ころ餅ぢやアあるまいし」「ちよッ、意氣地のない、今更餡ころ餅なんぞに未練を残すない、男ぢやアないか、せめて受けた盃だけでも深く飲めよ」「ぢやア思ひきツて一口に飲むから、これツきりだよ、宜いか」「や、こりやア驚いた、案外みごとだ、なか／＼あの飲口が下戸なもンか、この狸め、さア飲め、飲めないと言ツても飲ますのだ、人を、人を馬鹿にして、酒鹽で酔ふ奴が今のやうに飲めるもンか、是非とも重ねて」「だから今、斷ツて置いたに」「だからも寶もあるものか、おい皆、油断しちやアいけないよ、こり

やア飲めるンだから、さア攻めろ〜」
 三人いづれも心に一物あつて三方より寸隙なく斬り込みつゝ、遁しもやらす怒らしもせず、
 雄吉たゞ一人を中間に取圍んで千變萬化に手を盡せしかば、さすがに防ぎかねて、いつしか二
 杯三杯、果は五六杯も飲みしころ、元來その身の天生のみならで父よりの遺傳をも稟けたる
 大の下戸、俄に五臟六腑を掻きまわらるゝ心地して、くわつと満面に朱を注ぎしが如く、いよ
 々座にも得堪へず我を忘れて身を横たへぬ、
 しめたぞ、さアこれから最後の止めを刺せとて盃洗に冷酒を入れつゝ、雄吉が酔ひ倒れた
 る耳朶に口よせながら「おい、そんなに苦しけりやア水を呑め、水を飲むと直に醒めるから、
 そら、ぐつと一息に、宜いかね」いひつゝ、口元に杯洗を持添へて傾ければ、全身燃ゆるが如
 く熱する折しも、耳まで遠く幽に水と聞えたるを幸ひ、苦しきまぎれに寝ながらの一息、がぶ

く〜と飲めば南無三寶、おのれと思ひしが、身に取つて毒藥に等しき效能そのまゝ、前後も
 知らずなりぬ、さア死骸を葬れ、しかし墓は何處にしよう、阪町か、難波新地か、九郎右衛
 門町か、なるべく格式の低い寺にしろ、そら今の一件があるから」

其二十一

むかし佐伯氏長と聞えしは、身材七尺六寸、膂力は荒れたる猛牛の角を擱んで動かせず、體
 量四十六貫、帝都より相撲の節會に召されて、最手の位を取つたるほどの男なりしが、三十
 四の秋、一滴の酒に死人の如く酔潰れて怨恨を含める少女のために刺殺されしといふ、
 されば世間普通の下戸といへるは上戸に對する言葉にて、酔ふといふは酔はざるものより分
 量の少き意味、いかなる酒嫌ひも一杯の盃に前後を忘るゝ筈はなけれど、こゝに澤田家の三
 男雄三郎の雄吉は、天性うまれながらの禁物にて、かの佐伯氏長の祈禱兒にてやありけむ、

わづか四五杯の酒に忽ち毒藥を飲めるが如く苦しみが、その苦痛も時うつりて後は夢うつつ、我を忘れて前後も知らずなりぬ、

されど酔ひし酒の醒むる時ありて、雄吉やうく我に返りつ、ふと目を見開けば南無三寶はや夜に入りて法善寺あたりの小料理屋と思ひの外、屏風の陰より燈火ぼつと幽かに我を笑ふが如く、いつしか身は白粉臭き夜具に包まれながら、しかも主はなけれど我と竝んで別に一箇の空枕さへありける、

油斷大敵、さては三人の奴等に謀られたるか、世を忍べる名物男が土民の草刈鎌に寢首を搔かれしと一般、無念心外、腸に徹すれども今更ら何と詮方もなければ、元來不敵の雄三郎、そのま、驚いて跳ね起きもせず、しづかに頭を擡けて手を打鳴せば、やがて梯子段トンくと上り來る足音して屏風の陰より半身おぼろけに化物の如く現はれし二十三四の女「お

お目ざめだツか、お冷水でも」「いや、水も入らないがね、全體こ、は何處だ」「ほ、、、あほらしい」「あほらしいぢやアない、全く何處だよ、どうせ眞面目な家ぢやアあるまいね、第一乃公は、いつ此處へ來たんだ、外に同伴があつた筈だが」「お同伴さんは先刻」「む、歸つたんだな、よし、そして歸りがけに何とか言つて居たかい、また三人とも平生から來る家かね此家は」「い、え、始めて、始めて」「始めて來たんだな、しかし萬事の勘定は全體どうなつてるね、きたない事をいふやうだが」「それは、あなたに任したと、いうて居やりました」「さうかい、そりやア少々困つたな、ところで勘定は幾何ほどになるね」「ほ、、、そんな現金な、まだ貴方、あの娼妓も來てやおまへんがな、まアゆつくり朝まで、おやすみやす」「いや、あの娼妓も此娼妓も入らないから、ちよいと勘定して來てくれ」「それでも貴方、あんまり」「それでも貴方はンぢやアない、急に思ひ出した事があるから、何、いづれまた來るよ、

いくらだ、幾何になるね、さア早く頼むぜ」
 大阪は節期勘定とて、一切みず知らずの客をせざる聞きしに、此家を始めてとは儲こそ下
 等の家臺骨、小面倒なる泥水へ落とし居ったと思ふうち、かの女また上り來りて勘定書を差出
 しぬ、みれば三人の奴原いづれも酒色を恣にせし證據いち／＼残りて合計九圓九十八錢、
 わづか二錢銅貨一枚の相違にて十圓と書出さざるところ却って卑しく小面倒けれど、雄吉を
 のま、首肯いて微笑を含みながら、「時に、氣の毒だがね、今こゝに持合せがないから、ちよ
 いと使者をやつて貰ひたい」「へエ何處へです」「心齋橋の通り筋で、舶來の小間物と煙草を
 賣る東屋といふ家だ、その家の御主人に渡すんだ、もし主人が不在なら細君に、宜いか、決し
 て外のものに渡しちやアいけない、また此家を隠すにも及ばない、立派に名乗あけて眞正面
 から這入ッて行け、ちやア硯と巻紙、え、同じ事なら女郎に手紙を持たしてやりたいね、か

まふもんか、はッは、、、、、」

其二十二

今日は例月に二度の休業日とて、朝より店を開かねば、夜に入りて猶更早く門戸を下せしこ
 ろ、三人の手代いづこよりか打連れて歸りつゝ、そつと奥を差覗きながら、折しも主人夫婦
 が差對うて次の室にあるを幸ひ、わざと聞えよがしの大聲に重吉まづ叫び出しぬ、「やア驚い
 たね、全く驚いたね、實に今日といふ今日は驚いたよ、五六年も前から來て居る我々よりや
 ア、すつと遙かに委しいんだもの、まアいつのまに、あんな處を知つたのだらう、おそろしい
 男だぜ」「いつのまッて、あの様子ぢやア、きのふ今日の馴染でないね、なんでも度々出かけ
 る鹽梅だぜ」「そりやア知れたことさ、我々のやうな間拔けた馬鹿正直と違ッて、萬事が目か
 ら鼻の穴へ抜け通る機關人間だもの、すつぱり淺黄頭巾を被ッて奥齒どころか總齒に絹きせ

るたア全く雄吉どんのことさ」「は、、、、、しかし雄吉どんも、ありやア不意を喰ったんだ
 ぜ、何故、なぜって、さうぢやアないか、全體なら我々三人に秘すべきことたらう、ね、そ
 れが汝、千日前から法善寺の裏門を何心なく出ようといふ途端に、變な女が後から飛んで来て
 委細お構ひなしに雄吉どんへ、は、、、、、かぢりついたからよ、そこで雄吉どんも我々の
 手前、もはや平生の化の皮が現はれた自棄ッ腹で、この上は我々を同伴に組で落さうといふ
 勢だつたから堪らないや、は、、、、、しかし面白かつたぜ、あの女めが無遠慮に雄吉どんの
 袖を掴むや否、雄吉どんがまた重吉どんの袖を掴んで放さない、こいつ堪らぬと重吉どんが
 泣面しながら乃公の袖を掴む、まるで晝に描いた手長猿が引張り合つた鹽梅で、そのまゝ、ぞろ
 くと引摺込まれた家が、それ、あれだつたからな」「いや實に困つたな、しかし我々が遁け
 る事も出来ずさ、仕方なしに暫時、同伴に酒を飲んだもんだから、もうこれならばと安心して

常は下戸だくといふ雄吉どんが、どうだ、あの飲んだこたア、人を馬鹿に、何あれが下戸な
 もんか、その證據にやア、酔ッぱらって倒れたす隙に我々三人が遁けて歸つたのも夢うつ、
 さらに御存じないほどだつたからな、しかし今となつちやア、何となく氣の毒だね、もう我々
 三人も味方だと安心して居たんだから、どうかして起してやれば宜かつた、無理にでも同伴
 に連れて歸れば」「だがね、あ、酔ッちやア逆も無効だ、どうして連れて歸ることが出来るも
 ンか、まア我々三人で今夜の事だけは内分にしてやるのさ、かうして居りやア兄弟同然だか
 らね」
 三人の手代どもが頻りに語り合ふ聲、手に取る如く聞えしかば、夫婦おもはず顔を見合せて
 眉を顰むる折しも、一人の丁稚が走せ入って一封の手紙を差出しぬ、しかも雄吉が筆にて、
 憚りもなく夫婦二人の宛名を書連ねたり、

主人まづ手に取って封を切りつ、讀み下せば、

私こと、實に不心得いたし何とも申譯無之次第に御坐候へども、表書のところにて女郎買いたし候、其勘定に差詰り候間、何卒金子十五圓この者に御渡し下されたく願上候へ候、右十五圓のうち十圓は實費の勘定にて殘金五圓は樓中の女どもに祝儀として遣はしたき考へに候、

もし雄吉を此ま、御捨置あそばさる、思召にて候へば其段ちよいと御一筆の御返事下されたく候、

去年以來の一方ならぬ御高恩こそあれ此ま、出さず候とも決して御不足など申上候やうなる雄吉にては無之候間、御安心の上、斷然御ことわり下されたく候、委細は歸宅の上と申上ぐべき筈に御坐候へども、さて歸宅の上にも右の外に委細無之候

間、こゝにありのま、願上候、

雄吉

御主人御夫婦様

其二十三

今しも三人の手代が物語を聞いて思はず眉を擧むる折しも、その言葉に違はぬ難波新地より雄吉が手紙、しかも我から名乗って十五圓この者に渡しくれとの文言に、女房まづ驚き呆れて聲を潜めながら、「あらまア、本當ですね、まさかと思つて居たに、どうしたもんでせう」「ふむ、」「いえ貴方、實ア妾も始めのうち、どうも變だ、あんまり氣が利き過ぎてると思つたんですが、貴方が、いや見込があるの、その變なところが面白いの、和女なぞの知つた事でないのツて、いろ／＼仰しやるから、つい貴方、こんなになつたんですよ、いくら主人の

當世三人兄弟

氣に入ッてるからッて、あんまり、ずうぐいしいぢやアありませんか、貸した金を取るか何ぞのやうに、まだ申譯かないと思ッて青くなるんですが、手紙なんかで、しかも夫婦の宛名でさ」「まア喧ましく言ふない」「言ふなッて貴方、第一これぢやア店が棄れますよ、他の者の始末が出来ませんから」「宜いッてば」「宜かアありませんよ、何が宜いもんですか奉公人の身として」「宜いッてば、乃公が主人だ、萬事、主人の料簡にあるこッた、黙ッてろ」「だッて貴方、世間ぢやアお玉の養子にするんだとか何とか、いろんな噂まである最中ですよ、しかし皆、貴方が悪いんですよ、キツと貴方が、どッかで仰しやッたからでせう、妾は始めから、何も不自由ッたらしい、店に使ッた人間を養子になぞ、よく思ッて御覽なさい、うちの玉は大阪中にもないくらゐの容色ですよ、どんな家からでも立派な養子の來人は澤山ありますよ」「え、喧しい、靜にしろ」「それでも貴方、喧しいといふに、何も雄吉を養子に極めた

理由ぢやアなし、また彼奴が乃公の身内といふぢやアなし、奉公人といふこたア當然さ、しかし、さしづめ、この十五圓を遣らなきやア身動きが取れまい、困るだらう」「困るッて自分が勝手で困るんですもの、そして貴方、十圓の勘定だといふに、別にまた五圓の祝儀を遣りたいなッて、あんまり人を馬鹿に」「いや、そこに面白ところか」「まだ面白いんですか、何が面白いのです」「面白いのさ、この手紙の文句に自然と面白いところがあるんだよ、なか／＼人の出来ないところが」「おやく、左様で御坐いますか、ぢやアどうとも思召通りに遊ばせ、なるほど、雄吉は、えらいもんで御坐います」「また妙に出るよ、何も別に、えらいと言ふんぢやアないが、まア普通よりやア少々毛色の變ッた奴だね、どうしても變ッてるよ、第一こんなところからの使者なんぞといふもなア、そツと人しれず虚言八百を並べて、いろ／＼な浅い細工で來るもんだがね、かう麗々しく手紙を書いて、さらに怖れ氣もなく眞正面から、

しかも自己が奉公して居る主人夫婦の我等へたア、なか／＼面白い、面白いのみでない、どうしても何か其間に様子のあることつた、それも彼奴が手も足も工夫のないもんなら兎も角、現在あの身元引受人にしてある車夫へ七十圓といふ金を預けてある雄吉だ、また困ることを知つて居ながら、こんなところへ飛込むほどの馬鹿ぢやアないからね、ともかくも十五圓といふが、乃公は倍にして三十圓を持たしてやる、見て、御覽、この三十圓のうち十五圓は必ず持つて歸る奴だから、もしこの三十圓を天から降つたものと思つて、そのまゝ流連するやうな男なら、それこそ乃公が鑑定違ひだ、和女にも娘にも謝つた上で、すぐに彼奴を叩き出すから、ね、つまり、これまでの奉公に對して三十圓の涙金と思やア高くもないさ、なアに歸つて來たら直に分るよ、乃公が思ふにやア、あの雄吉といふ奴は、一萬や二萬の金で悪い事をする男でないね、まして十五圓の端金、こりやア何でも、キツと理由のあることつたぜ、し

かし店や奥の金も出せないから、乃公の紙入を持つて來な、乃公の小遣から出してやらう」

其二十四

年數と店の廣きと品の多きとは他にもあれど、心齋橋筋の東屋といへば舶來小間物の最上店、大阪紳士が嫌でも應でも知らで叶はぬ筈との風評、されどこの風評ぐらゐに鼻頭びこつかせて、おのれ一人が天下取の氣になるほどの淺き料簡ならず、深い腹の底には猶も晩年の一物、見事な死花を咲かせんとする老爺なれば、この雄吉を見るだけの目はあるべし、あの手紙を讀んで思はず膝を打つだけの器量はあるべし、まさか素丁稚が途中で失策せしとは同じ事に扱はざるべし、されど萬々一、かの十五圓を出しかぬる男ならば、今日かぎり再び東屋へは歸るまじ、此家の勘定は何のその、東京の澤田家が一子と名乗らば、電報の問合せのみにて千圓二千圓は糸瓜の皮ぞと、空嘯いて待受けし雄吉の鑑定に違はず、果して一封の返書、しかも

中に三十圓ありける、

や、おもしろい、十圓の勘定に五圓の祝儀と書き加へしかば、その十圓だけを封入すべきが世間普通の面白き奴、さるを倍にして三十圓とは一入さらに面白い老爺かな、こりやア一番この雄三郎が取組甲斐のある奴、まづ當分は此ま、の奉公人でこそあれ、彼奴が一朝こゝぞといふ本音を吐きし曉は、我また澤田家の三男と打明して互ひに手を取り、この大阪の中央を動かすほどの太い働きしてくれんと、その三十圓のうち十五圓を引抜いて、まづ十圓の勘定五圓の祝儀と投出せば、忽ち槌で庭を掃くべき家業からの女ども、いづれも驚いて前後を圍みつゝ、ぼんちく〜と騒ぎ立てぬ、

は、は、は、は、ぼんちく〜とは妙だ、さらば此ぼんちが再度そのうち遊びに来るから、よい玩弄物を用意して置けと笑ひながら、悠々と立出でて車にも乗らず夜の十時ごろ、やう〜

東屋の門口まで歸り來りぬ、

門の戸あけて入るや否、折しも額を鳩めて何をか私語く三人の手代を見ながら、「やアお早う、いつの間に逃げて歸つたの、さッぱり知らなかつた、は、は、は、は、何か、お土産でも持つて歸る筈でしたがね、まさか君達が宵のうち、ちよこ〜と引張込んだ娼妓を連れて戻るともゆかず、しかし三人とも別段お怪我がなくて重疊、この雄吉、たい一人、落武者の殿に取残されて、いやはや數箇所の手傷、もはや討死と覺悟を極めたが、やう〜一方の血路を開いて、は、は、は、は、」

三人あツと呆れて言句もなく、おもはず顔色を失うて身を縮めし體、雄吉じツと尻目に睨んで冷かに笑ひながら、そのま、奥に入りて主人夫婦が前に容を改め頭を下けぬ、
「只今、歸りまして御坐います、今日は實に、何とも申譯のない次第で、恐れ入ります、以

後は決して、必ず、もはや再び斯やうな見苦しい事は致しませんから、此度だけはひらに、全く私の心得違ひで、かうして直ぐ、お目にかゝれる筈は御坐いませんが「いひつ、懐中より十五圓を差出して、そつと夫婦の前に置きながら、「お願ひいたしました金子だけを、いたゞきまするさへ、實に恐れ入つて何とも申上げやうのない私へ、倍にして三十圓とは、實に、まことに、骨身に徹して有難う御坐います」

女房より主人まづ膝を進めて、「おい雄吉、今日の不始末は、全く汝が発頭人かね、もし其間に何か込み入つた理由でもありやア」「いえ何も申上ぐるほどの、理由などは御坐いません、たしかに私が、悪いので、へエ、以後を謹みますから、どうか御免あそばして」「ふむ、汝が発頭人で、いよくさうか」「先刻手紙で申上げました通りの始末、歸つてから委細も仔細も」「よし、それで宜い、今日の處は一應、ゆるして置くから、以後を慎むのだぞ、わかつたか」

「恐れ入ります、たゞ恐れ入るより外には」「ぢやア早く寢ろ、あらためて明朝、きく事があるから」「へエそれでは細君、御免下さいませう」

其二十五

今日こそ雄吉奴を存分、深いところへ突き陥めたり、しかも我々三人が抜驅に馳せ歸つてわざと聞えよがしに主人夫婦が耳を貫き置いたれば、いかな彼奴も往生寂滅、もはや浮ぶ瀬もあるまじ、再び當店へ足踏もなるまじ、よし立寄ればとて忽ち叩き出さるゝは必定と思ひの外、一本の手紙に萬事さらりと埒あけて、のこくと無事に歸り來りしのみか、主人の前に出ても自己一人が罪を脊負ひつゝ、さらに我々三人の事をいはざりしかば、いづれも却て小氣味わるく、何とやら鬼の手に脊を撫でらるゝ心地して胸を轟かしぬ。されど其後さらに主人が我々を怪しむ氣色なく、また雄吉も一切すべて我等を怨む風情なく、

しかも主人と雄吉の間いよく打解けて親しき體に、三人の手代共いつしか自己が事を忘れて猶更に嫉妬の念を固めつゝ、果は闇の夜に引摺出して叩き伏せんかとまで覗ひ寄りぬ、戀の野心も雄吉への嫉妬も、第一わけて深きは例の重吉、このほどよりお玉が心地わるしとて奥の一室に打臥せしかば、せめて思ふ心の端をも通じたしとや、面にも似合はぬ愛敬を浮べて、をりくお菊に今更らの追従輕薄、店の寸隙を狙うては自己たゞ一人、用もなきに用ありけの思案顔しながら、ちよこく奥へ走せ入って「おい、お菊どん、お嬢さん、御病氣はどうだね、ちつたア宜いかね、なるべく氣をつけておあけよ、萬事が和女でなくツちやア納まらない方だからね」「ほ、ほ、ほ、お世話さま、さう申して置きますわ、しかし重吉どん、お嬢様の御病氣が、さう心配になるかね」知れた事さ、同じ御主人だもの、當然の事よ、奉公人の身として「おや〜」「おや〜たア何だ」「おや〜だから、おや〜といつたのは

い、おや、おや、おや〜、おや〜」「此女め、人を馬鹿に」「ところが、人様を馬鹿には致しませんよ」「ちやア何故、乃公が心配して眞面目に言つた事を冷かした、おや〜だなんて」「左様、人様を馬鹿には致しません、重吉どん、おまへを馬鹿にしたの」「畜生」「畜生とは何です、畜生とは、もし妾が畜生なら、おまへは蟲けら、それも鈴蟲や、松蟲のやうな優しい蟲と思ツちやア的が違ひますよ、また玉蟲のやうに美しい筈は猶更ら以ての事、まづ油蟲か蠅蚘か、最眞目で見たところが芋蟲ぐらゐですね、ほ、ほ、ほ、口惜しいかへ、口惜しかア打つなり叩くなり、辻の交番所と御相談の上で、いえもう貴方、思召し通りに、ほ、ほ、ほ、べつ」「べつ、べつとは何だ、此うんてれがンの肥ッてふ女、全體、てめへは何を喰ッて、さう肥りやアがるんだ、まるで釣上げられた虎河豚のやうだぜ、第一その臀の大きいことツてば、夕立の雨宿りに二三人は慥かなもんだな、今月來月來々月、伊達の對決、糞でも喰へ

といふなア全く其臀のこつたぜ、は、は、は、それでも仕舞にやア亭主を持つたらうが、困つたもんだね、持たれる亭主の身になつて考へると、しかし夫婦となりやアまた格別、さうでもあるまいかな、ねエお菊どん」「そんなに羨ましくば肥つて御覽よ、蟻螂め、妾の亭主になる心持より自分の女房になるもの氣を察してみるのが宜い、まるで人身御供に上るも同然だ」「人身御供」「さうさ、誰が人間に連添ふ覺悟で来るもんかね、それに大それた、恐れ多い、お嬢様の御病氣は何うだね、は、は、は、どうだねが聞いて呆れるよ、重吉が貴嬢の事を心配して居りますな言つて御覽、それこそ大變、そのまゝ、御病氣が一時に重くなつて、どんな騒動になるか知れやアしない、それでなくともおまへの顔さへ御覽なされると、すぐ御氣が鬱いで胸先が苦しいと仰しやるんだもの、何も御奉公だからね、いッそ顔の雜作を取退けて仕舞つて、ブンべらぼうになつたら萬一お氣に入るかも知れないよ、ねエ重吉どん、あほら

しいやおまへんか、ほ、は、は、は、あほらしいやおまへんか、いつの間に稽古しやアがった畜生、うぬが中途で、いくら垣を据ゑてもな、へん男だ、男は萬事の働き唯この胸にあるのさ」「足の裏になくつて僥倖、もしあれば今ごろ踏み潰して空となつてるだらう」「べらぼう女、踏み潰すもんか、鐵の草鞋だ」「さぞ重いこつたらうね」「え、軽いわい」「ふけば飛ぶやうかへ」「この虎河豚め」「この芋蟲め」

其二十六

品の損じはなけれど時の流行に後れたるもの、時の流行に叶へど品に損じのあるもの、一切すべて東屋の賣品としては面白からざるものを掻集めつ、他の舶來商店に賣り渡さんがため、殊更に主人より命ぜられて倉庫に入りながら、雄吉たゞ一人いち／＼帳面に引合して餘念なき折しも、當家の常例とて店のもの一體に茶を出すべき午後三時となりけん、かのお

菊が盆に茶を汲み上げて微笑を含みつゝ入り来りぬ。

「おや雄吉どん今日はお一人御苦勞さま、さアお茶を召上れ」
「有難う、もう三時ですかね、わざわざ持ッて来るにやア及ばない、さう小僧に言付けて下されば、店で朋輩と同伴に戴くもの」
「なアに、ついでだから持ッて来ましたのさ、さアおあがり、さめないうちに」
「ちやア此まゝ、こゝで、おや、この茶ア平生の茶と違ッてるね、こりやア玉露だ」
「ほゝゝゝ、違ッて居ますさ、店へ出す茶でないから」
「ふむ、奥のか」
「お嬢様の召上る茶ですよ」
「そいつアお菊どん、いけないよ、お芳志は有難いがね、こんな事をすると宜くないよ」
「宜いちやアありませんか、朋輩の前で飲むぢやなし、また、お茶ばかりでないの、お菓子も」
「いけない、猶更悪いよ、そんな菓子なんぞ持ッて来ちやア、第一お嬢さんに濟まないぜ、儉んで来るなんて」
「おや、人聞きの悪い誰が盗賊なんぞしますものか、あのウ雄吉が今日は一人

で倉庫に居ますから、お嬢様このお茶を遣りませうかと申し上げたら、いゝえ、それは出殻しだから、いけない、あたらしく入れておやりつて、しかもお菓子は妾が願ッたのではないの、御自分で出して下すつたのですよ」
「いや、思召は有難いがね、もし此後こんな事を仕られちやア困るよ、第一お菊さんが悪いよ、時に御病氣は如何ですな、別に伺ふのも變だから、ついでと目と鼻の間で御無沙汰ばかり」
「如何ですって雄吉どん、あのお嬢様を誰が御病氣にしたと思ひなされるの」
「はゝゝゝ、からかつちやアいけない、病氣は自然さ、人が毒を盛ッたといふでなしさ」
「いえゝゝゝ、毒を盛ッた人がありますの、其奴、人殺し同然だわ」
「これ、大きな聲で、つまらない」
「何をツて、雄吉どん、貴方ア過日、どこで遊んで来たの」
「これさ、今更、そんな妙な事を聞いちやア困る、ありやアもう濟んだ事だよ」
「自分は濟んでも、濟まない方があるんですよ、わからない人だね、じれつたい」
「はゝゝゝ、」
「おや、何が呵しいの、

は、は、は、では済みませんよ、この人殺しめ」「これさ」「これさも、あれさもないもんだ、罰あたりめ」「ひどい事をいふね、人殺しだの罰あたりだのツて、何も、そんな覚えはないに」「ない、いえさ、無いとは」「まるで喧嘩しに來たやうだね」「喧嘩どころか、事に寄ると咽喉筋へ喰ひつきますよ」「おい、よせといふに、ふざけちやア困るよ全く」「困るなら白狀なさい、どこで遊んで來たの、全體それが、お嬢様の御病氣になつた原因ですよ、あの雄吉が外に何かあるんだらうと、お言ひなさらなくても妾には、ちやアんと、分るの、はい、だから其委細を聞き正した上で、貴方をお嬢様に謝罪らせる決心ですよ」「旦那と細君に充分、あやまつて済んだ事を」「それ、そんな間違つた料簡だから御病氣になるのさ」「いよく困るな」「さア何も文句は入らないから」「別に文句を言ツちやア居らない筈だが」「そんな事は何うでも宜いとして幸ひ今、誰も奥に居ないから、そつと來て、お嬢様に、おわびをなさい、ものを言ふのが

變なら、たゞ頭さへ下けて置けば宜いんですよ、あとで妾か、うまく取締ツてあげますからさ」「おいよくいけないツてば、無暗に引張ツちやア破れる、おい、これさ」「袖の破れるぐらゐ何です、來ないと喰付きますよ」「ば、馬鹿な、これさ、よさないか」

其二十七

處女の頭痛と婆の朝寢とは、いづれ曰くのあるべきもの、こゝに東屋の祕藏娘、かのお玉が此ごろ俄に心地わるしとて、おのが部屋にのみ垂籠めながら、醫者は一切いやとて只ひとり物おもふ體を母親しきりに劬はりて、平生は禁ぜし演劇さへ勧めしかど、さらに見る氣もなく鬱ぎ込みつ、父が言葉をやめて、希望の衣類を好む次第と慰むれど、それさへ物憂げに答へて喜ばねば、もはや菊より外に相手なしと打任されたる菊が心中、たしかに其事と思ひながら、うちあけて尋ねもならず、果は苦しまぎれに雄吉を捕へて倉庫より引張り出し、幸

ひ人なき奥の縁端に待たせて二坪の中庭を隔てつ、お菊その間に胸三寸の策略、そつとお玉が傍に差寄りながら、「お嬢様へ、あの雄吉が只今お茶菓子の御禮を申しに参りましたから、ちよいと此處から、お顔を出して何とか言ッておやり遊ばせ、御病氣の御見舞も兼ねて來ましたよ」さらぬも此ごろ閉籠りて物凄きまで眞白の頬に時ならぬ薄紅、ぱつと色さしぬ、湯呑茶碗に玉露一杯、白紙に蒸菓子五箇、以上して二品のために倉庫より引き出されつ、しかも縁端に手をついて、やんごとなき姫君に對ふが如く中庭を隔て、御意を伺ふとは、馬鹿々々しいやら呵しいやら、高が五間まぐちの小間物屋が娘と思へば、猶更馬鹿けて滑稽に頷すれども、今は奉公人としても新參もの、雄吉、此方より慇懃に頭を下けながら、「え、お嬢様、只今は有難う御坐います、して御不快は如何で御坐いますな、折角お大事に遊ばすやう」いひつ、起ッて見返りもせずまた倉庫に飛込んで思はず舌鼓をうちぬ、ちよつ、ふざけた眞

似をさしやがる。

店頭に立出でて手代どもと無邪氣に戯れしお玉は三四年以前のこと、いつしか年ごろとなりて兩親の監督も厳しくなりつ、また其身も自から何とやら人に顔みらるゝが恥かしき心地して後は、きのふまで親しかりしも男といへば改まる風情、たゞ奥にのみ引籠りし十七の今日このごろ、新たに來りし雄吉なれば一入わけて物いひ交せし事もなき折しも、誰が言ふとなき噂さへ耳に入りて、猶更面はゆけなる其雄吉に、今しも聲かけられし時の體を見て、お菊いよくそれぞと人しれず心に首肯きぬ。

「ねエお嬢様、あの雄吉に只今お茶菓子を遣はしました時、どんなに喜びましたらう、さしいたゞいて居りましたよ」「おや、さうかへ」「さうですとも、妾が雄吉なら有難涙をこぼして嬉し泣きに泣き出しますわ」「あら、菊」「あら菊ちやアありません、全くのこッてすよ、時に

よ」「こりやア變だ、敵の和女がわざ／＼」「だまってお飲みさ、よう此人は」「は、／＼、い
くら喧嘩をしても腹の底に悪氣のない女だ、どツか頼もしいところがあるよ、ねエ、おや、この
茶は」「平生のと味が違つてるだらう」「大違ひ、此奴は上茶だ」「これ、さう無闇に、がぶ／＼
飲むと罰が當つて咽喉が腫上るよ、さアこゝに菓子もあるから」「や、毒藥でも仕込んである
ンぢやアないか」「無理もない、さう思ふのも無理はないさ、それにつけて猶更不思議だわ、
どう考へても、妙だね、全く希代だよ、その顔で」「なんだ薄氣味の悪い、じろ／＼と人の面を
見詰めて」「ふしぎだよ、どう見ても考へても」「おい／＼たのむぜ、今日は忙しいんだから、
しかし今の茶と菓子は全體、どうしたんだ」「これ重吉どん、身でも清めてお聞き、實のこ
ろ、お嬢様からだよ、重吉が倉庫に居るなら、人に知れないやう、そツと、これを持ってツてや
れとさ」「は、／＼、／＼、また乃公を馬鹿に」「馬鹿でないよ、本當だよ、もし虚偽と思ふならす

ゞ妾と同伴に来て、ちき／＼お嬢様に御禮を言つて御覽、いや、いふべきが當然だよ」「ふむ、
ン」「ふむ、ンで済むかね」「いや全くか、お菊どん、實際かね」「だから同伴に来て、禮をお言
ひといふのさ」「ちやア本當だね」「え、うるさい、もう知らないよ、勝手にするが宜い、折角
の思召を何とも思はないで、ふむ、ンと鼻の頭で笑ひましたと、さう申上げて来るから」「お
い／＼、お菊どんツてば、何も和女さう腹を、お立て遊ばすに及ばンぢやアないか、いやさ、
どうも、これが本當の事としてみると、ねエ、おい、はてな」「ぐづ／＼と何だね」「いや、決
して、ぐづ／＼してる譯ぢやアないんだ、しかし、お菊どん、怖いもんだね」「何がさ」「人の
一念といふものはさ、いよ／＼届いたと見えるな、いつの間にか通じたのだな、ふむ、ン」
「おや、また呻るのかね」「これさ、いち／＼さう斬込ンぢやア困るよ、ところで、まづ和女
と同伴に、これから、行つてさ、何というたら宜いだらう」「つまらない人だね、ともかくも、

只今はと、お茶菓子の御禮をいふのさ、するとお嬢様がまた何とか仰しやるから、その上は此方の腕次第、如才はない筈だに」「なるほど、いや分つた、しかしお菊どん、こりやア極々の内分にして貰はんと困るよ、乃公は兎も角、第一お嬢様の身上にかゝることだから」「内分にするなど言つたつて、せずにやア置かれるものかね、妾だつて無事に居れない事だもの」「ああ、こんな事と知つたら、可哀さうに、何もいぢめなくつて宜かつたに、しかし、これからア乃公が攻撃められる人になるのか、仕方がない、昔からの定例通りだ」

其二十九

重吉まんまとお菊に謀られて、こゝが世にいふ人目の關を、同じ縁端より中庭を隔てつ、お玉に禮を述べれば、お玉またお菊に致へられたる通りの言葉やさしく、まして雄吉に對ひしとは自から異なりて恥かしき風情もなく、一つには我戀の敵と思ふ憎さのあまり、わざと

情らしう振舞ひしかば、さらぬも茶と菓子に魂天外へ飛び失せたる重吉、もはや目が眩むほどになりて、足腰も抜けしかと思ふばかりの體を、お菊に促されて再び倉庫に入りながら、もはや何事も手につかず、たゞ茫然として飢ゑたる啞の如くになりぬ、

今年やうく十七の處女が、あれほどまでに我を思つての言葉は、さても怖ろしや戀が教ふる業、それとは知らで今日の今までも敵は本能寺にありとのみ覘ひし愚さよ、おもへば何の罪もない雄吉奴を氣の毒の至極、殘る二人の味方に對しても俄に翻つて出し抜いたるやうなれど、如何にせん、こればかりは義理も約束もない筈、まして分割の配當にもならず、第一本尊すでに我に來給ふ上は致方もなし、あゝ此後この重吉が竟に嫉妬の的となりて、四方八方より叶はぬ戀の箭を射られんこと必定、されどまた此身代にあの美人を添へて我物になるかと思へば、今のうちから塵埃一本も粗末にならじと、俄に打つて變りて一生懸命に働き出せ

ば、あとの二人いづれも顔見合して眉を顰めながら、人なき折を窺うて例の事はといへば、重吉おもはず首を振つていふ、「なるほど最初は、そんな考へもあつたがね、つらく思ふと餘り善くないこつたよ、何、あの雄吉か、あれも先づ此ま、に仕ておいてやれ、あんまり急に叩き立てると却て自分の塵埃が出るからね、いづれ其うち何かまた、面白い事があるさ、この重吉が居るから安心しな、君等の爲に悪くはないから、は、は、は、世の中は妙なものだよ、何事にも腰より足より面まづ突き出して第一番に慌て出すべき奴が、此ごろ俄に反身となつて妙に落附き變に濟し込むのみか、をりく、何をか自己ひとりが聲もなくニヤ／＼と笑ひ、さてまた夜中に跳起きて店を見廻し兩腕組みつ、目をむいて豚の如くに呻り出す體、どうも阿しいと思へば萬事につけて猶更阿しく、人目を忍んで朝夕に湯屋へ走込み、三日にあけず床屋へ驅け込んで有りもせぬ髭を氣にするやら、滅多無性に小僧を叱り飛ばして威張り出すや

ら、旗頭の通ひ番頭に對うて小理窟をひねくるやら、いよ／＼増長して果は奥へ無遠慮に入込みつ、お玉が部屋を此方より窺うて頻りに妙な手眞似などせしかば、お玉きやつと驚いて逃入りぬ、

あまり小面の憎さに、たい面白半分の悪戯にせし事なれど、今は流石のお菊も怖氣たちて顔色を變へつ、「お嬢様、どうも變ですよ、あの才槌が、もし狂氣になりやアしないかと思ひますわ、全く此ごろの様子ぢやア」「だつてお菊、おまへが悪いんだよ、何とかしておくれよ」「そりやア貴嬢、妾が斯うして朝夕お附き申して居るからは、指でもさ、すこつちやア御坐いませんが、貴嬢もなるべく、お顔を見せないやうになさいましよ、まるで色狂氣ですから」「いッそ、うちあけて、お父さんに言はうかねエ」「めッさうな、そんな事が知れては貴嬢が第一、それよりやア、そつと妾が雄吉に相談してみませう、あの人なら、きつと善い智慧が

御坐いますから」「さうだねエ、それが宜いわ」

其三十

家のうちに人口多ければとて、さアといへば何時にても出らるべき用意を整へつ、お玉よりも兼ての用事を言附けられつ、しきりに雄吉の外出を覗ひしに、一日の朝主人に何事か命ぜられて急ぎながら出行きしを見るや否、おやお嬢様の御用が後れたと獨言もろとも、あとを追うて立出でつ、わざと二三町ゆきし横町の角より頻りに呼戻しぬ、

雄吉おもはず振返れば、お菊いそくと馳せ來りて、「ちよいと、お談話のしたい事があるんですよ」「いや、談話なら歸つて聞かう、今且那の急用で北濱まで行くんだから」「そりやアさうでせうが、何も妾の用でないの、お嬢さまの」「いけない、急用だ」「放しませんよ」「あれ、また取ッ擱るのか、おい、よせつてば、往來だから人が見るよ」「人に見られて、き

まりが悪いら談話を聞いて下さい」「困るなア」「どうせ困らすんですよ、時にね」「何だ、早く手ツ取り早く掻つまんでさ、白とか黒とか」「まアセツかちだこと、さう、せかくせすとも宜いちやアありませんか」「ありませんから急ぐのだ、しかし、さう落附いて居られちやア、こゝで立談話も出来ないね」「出来ないでせう、だから、ちよいと、どツかへ、お汁粉屋ではいけませんか」「どこでも宜いから、お早く願ひます、ちよつ、面倒くさい、奉公人だぜ」雄吉しぶくながら伴はれて横町の汁粉屋、當地での善哉屋に入れば、お菊おもはず笑を含みながら、「あのウ雄吉どん、お汁粉は何が宜いの」「何でも宜いちやアないか、汁粉を食ひに這入らないッだから、第一その談話といふなアどんなこツた」「外でもないんですがね、あのそら、才榎ね」「才榎、才榎とは」「え、分らない人だね、店の重吉どんがこツてすよ」「悪い事をいふよ、その重公が何うしたんだ」「あの重吉どんが此ごろの様子、よほど變でせう」「は、

は、随分、をかしいね」「さアその變についての相談ですの、全體あの才榎はね、けしからん奴で、大それた、お嬢様に戀をしてるの」「なるほど」「なるほどッて、さう平氣で聞かれますは困りますよ、もう少し身に染みて」「だッて、なるほどだよ、つまり、どういふんだ、こまぐくした道行は入らないから」「それでは、すぐ分るやうに言ひますがね、あの重吉奴、たとひ生れ變つたッて及ばない癖に、現在この世で、あのま、戀を遂げようとするんです、そこで先づ第一番に妾をね、うまく口車に乗せて、お嬢様に近寄らうといふ料簡で、實は從來、うるさいほど、いろんな馬鹿を言ひましたがね、しかし馬鹿は怖いもので、白痴の一心といふ事もありますから、さう一時に跳附けちやア却て宜くないと思ッて、妾が中間で、まア宙ぶらりんの相手になつて居ました、ところがどういふもんか、此ごろ急に騒ぎ出してあの通り全然色狂氣、過日もお嬢様のお部屋を覗き込んで、よッほど薄氣味の悪い手眞似とかをしたと

て、お嬢様が、それから急に熱が出たといふ騒ぎ、この上、あんな奴ですから、どんな事をするかも知れないッて、大變な御心配で、妾も全く當惑しますの、しかしこんな事を御兩親に打明けるのも嫌だから、誰か妾を可哀さうだと思ふ人に相談してくれと仰しやるんですもの、さしづめ妾の目では雄吉どん、免れませんよ」「いや、お談話は分つた、なるほど、そりやアお困りだらう、しかし、私が何とも、御挨拶しかねるね、さしづめ、免れんなごと、お菊どん、馬鹿な事を言ッちやアいけない、雄吉は店で使はれる奉公人だからね、しかも新參で」「おや男らしくもない、人に頼まれて其ま、お退きなさるの」「は、は、は、そこが少々間違ッてるよ、いくら男だッて、頼まれる事と、頼まれない事があるからね、つまり今の事なごアそれさ、どれほど相手が色狂氣でも何にせよ、此奴また奉公人だね、そして嬢さんにやア歴とした御兩親があッてさ、つまり大丈夫ちやアないか、人に相談も絲瓜も入つたもんでな

い、しかし、お菊どん、あの重吉の事は、陰ながら雄吉が氣をつけて居りますから御安心なさいと、さう申上げて置きな、は、は、は、わざく、おツかけて来たのは、これかい、つまらない」「い、え、この外にも少々、まだ川があるんですよ」「いや、もう聞かない、第一、ぐづぐづして居ちやア乃公の役目が濟まないから」「何、今度は直ぐですから、ほんの、ちよいとで分る事なの」「いけない、無用々々、雄吉は萬事わからない奴だと、さう言ッてくれ、もし尋ねる人があツたら」

其三十一

けに浮世と戀は心のま、ならぬもの、なるは嫌なる重吉が夢が夢中に立騒いで前後の差別もなく、思ふはならぬ雄吉が一切さらに見返りもせざる平氣の體を、本尊のお玉よりも例のお菊が獨り氣を焦ちて、こゝを天下分目と藻掻けば藻掻くほど猶更夢中と平氣の右左、え、

じれツたい、どうせう、かうせう、やめにせうかと思へども、のりかけた廚下の水溜り、こゝツて轉ぶところまでと下女の一心おそろしく、まんまるの腹の中央を人しれず捻ッて臍を固めぬ、

「ねエお嬢様、今朝、雄吉が何か旦那様の御用で急いで出掛けましたから、すぐ其あとを追ッかけて呼止めた上、これくの事で貴嬢が困ッて在らッしやるから、何とか宜い分別をし、てあけて下さいッて、否應なしに持掛けて相談しましたとね、お嬢様、あの雄吉が申しますには、なるほど、御容色も餘り美し過ぎると人は却て不幸なもんだ、そりやア嘸お困りだらうが、私も同じ奉公人しかも新參の身で、まさか頭上から吐り飛す譯にもゆかないし、第一これが外のこと、違ッて、戀は生命とやらいふ一生懸命の敵手だから、よほど、むづかしい大役だが、よろしい引受けました、それとはなしに意見してみても、もし聞かなきゃア、その

時こそ雄吉が一番ぐつと最後の働きを御覽に入れると、かう申して居りましたよ」「おや、さうかへ、ほんとは雄吉は頼母しい事ね、それで妾も大變、心丈夫になつたわ」「ですとも貴嬢いくら重吉が夢中になつて騒いだつて、逆もの事あの雄吉に叶ひますものか、それにまた及ばすながら、この菊がお付き申して居ります上は、御安心あそばせ、どんな事があつても旦那様なぞの御耳へ入れないうちに重吉を往生させますから、ほ、、、しかし、あんな馬鹿一途の才榎野郎は死んでから化けて出るかも知れませぬよ」「あら嫌だわ菊」「なに貴嬢、化けて出たつて怖かありませんよ、あの恍惚けた御面相で何處に凄味が御坐いますものか、却て阿し味があつて妙ですよ、夜中に出る奴が狼狽へて眞ツ白晝、店前を通る廣告の樂隊か何ぞを相方に、ほ、、、どんなに面白いでせう」「ほ、、、まア菊」「まア菊ちやア御坐いません、あんな奴は死んで化けて出るより、生きて眞面目の間が却て油断のならないものですか

らねエ、しかしお嬢様、いつか宜い機會を見て、なほ貴嬢のお口から雄吉に、お頼み遊ばせよ、あの重吉が嫌で氣障で怖くつて、うるさくつてならないから御前、なにかしておくれと、さう致しますと雄吉が猶更一層、力瘤を入れて貴嬢のお爲になりますから」「だつて菊、和女が能く頼んであれば、それで宜いちやアないか」「いえ、百舌鳥の百轉りより鶴の一聲です、もし貴嬢が仰しやり憎けりやア、ちよいと一筆お書き遊ばせ、そつと人の知れないやうに妾が手渡し致しますから」「嫌よ、妾は字が下手で、そして雄吉は何だか大層名筆つて、お父様が常々から譽めて在らつしやるほどだもの」「名筆か拙筆か、そんな事は構ひますものか、理由さへ分りやア宜いんですから、さアお嬢様、お硯と筆を持つてまゐりませう、もし妾が書けるなら偽筆でも致しますが、ほ、、、と、ところで、その御手紙を間違つて、あの才榎に渡したら阿しいでせうね、なんといひませう、嬉し泣きに泣きちやつて死んで仕舞ひますよ、

ほ、ほ、

其三十二

雄吉が何心なく倉庫より立出でんとするところを、かねて待受けたるお菊、幸ひ四邊に人なければ今この時と走寄ッて、胸帯の間より例の手紙を取出すや否、そツと袖を捉へて懐中へ捻込まんとするに、雄吉おもはず驚いて飛退きながら、「おい何をするんだ」南無三寶、はツとお菊も思はずまた元の胸帯に押隠して、「何もしやアしませんよ」「しません事があるものか、だしぬけに人の懐中へ、もし往來なら掏摸と間違はれるぜ」「おや、ひどい事を」「だッて、さうぢやアないか」「ほ、ほ、ほ、こりやア妾が悪かつたの、實はね、いつも餘り眞面目な顔ばかりして居なさるから、不意に、おどかしてあげようと思ッてさ」「ふざけぢやアいけない、小兒ぢやアあるまいし」「ほ、ほ、ほ、戯事は儲置いて、旦那様からの御用ですよ、お手紙を

委託りましたの」「まだ馬鹿を言ふよ、旦那の御用なら直接に聞く筈だ、役違ひの和女に、まして家の内で手紙、おい、宜い加減に戯談しろ」「い、え本當、今ちよいと奥へまゐりましたら、旦那様が何だか澤山の手紙をお調べなさいます中から一通、これを店の雄吉に渡せと仰しやッて、しかし受取れないなら此ま、奥へ返しますから」「え、それならさうと早く言ふが宜い、どツかの注文手紙だらうから、さアお菊どん」「出せなら出しますが、きツと受取りますかね」「つまらない事を言はずに早くよ、御用が遅くなるぢやアないか」「ぢやア先刻の通り、だまッて懐中へ捻込みますから、其ま、黙ッて、あとで御覽なさいよ、ほ、ほ、ほ、こんな時に思ふさま、いぢめてあけないと萬事の癖になりますから」「何だか變に怨恨があると見えるな」「ありますとも、なくッてさ、この平氣め、人の心も知らないで、さア捻込みますよ懐中へ手を出すと喰付きますよ」お玉に書かせし一通、雄吉の懐中へ捻込むや否、お菊そのま、

走せ去つて物蔭より窺へば、雄吉たゞちに取出して、まづ宛名もなき白紙の封筒に眉を擧めながら、打披いて一目みるより忽ち驚いたる體、おもはず目を丸くして四邊を見廻しつゝ、
 またもや懐中へ捻込んだる心中、否か、應か、吉凶いづれにせよ其場に捨てても破りもせざるは
 流石に腹の立たざる證據、筆の運びと言葉の上に戀はなけれど人目しので掛橋わたす書を
 受取りしは手形を預りしも同然、もはや此後は木で鼻く、ツた挨拶もなるまじと、また鬼の
 首とらねど初太刀を浴せし如き手柄顔して奥へ驅け入りぬ、
 たれ知るまじと思ひの外、手代の一人、そつと此ありさまを見るや否、畜生々々と踊り上つ
 て敵の要害を探りしが如く、かの重吉を店の片隅に差招いて口を尖らしながら、「さア見届け
 た、いよ／＼正體を見附けた、大變々々、うか／＼油断しちやアいけないぜ」「何だ騒々しい、
 何だよ」「何が何だもあるもんぢやアない、今、倉庫へ品物を出しに行かうと思つたら、あの

雄吉奴とお菊めが、いやに聲を潜めて摺つた揉んだの最中さ、こいつ面白いと忍んで見るとも
 知らず、さんざ互ひに、べちやくちや吐した結局、覺書のやうなものを野郎の懐中へ捻込んで
 遁出した後で、雄吉奴か色男の本家本元、これで御坐いといふ面相でよ、そつと読み下して何か
 妙に思ひ入れの體、まるで芝居さ、齒が浮くね、いや味つたらしい」「む、怪しからん奴等だ
 な」「む、怪しからん奴等だ位で済ます氣か、ありやアきつと本尊よりの戀文を、お菊めが掛
 橋したに相違ない、だから油断しちやアいけないといふに、發頭人の君が此ごろ何だか妙に
 引込思案ばかりして、とう／＼馬鹿にされて仕舞つたのだ」「は、は、は、いや大丈夫、お氣
 遣ひに及ばず、そりやア全く取組が違つてるよ、折角の注進だが鑑定が間違つてるね、つま
 り本尊と雄吉とちやアない、お軽と勘平、ある奴だよ昔から、は、は、は、しかし其まゝに
 もして置けまい、よし乃公か一番、あの野郎を取つちめてやらう」

其三十三

見える目をもて廣き世間を見渡し、また鏡に對つて自己が面を映せば、美醜いづれか忽ち判然すべき筈ながら、さて人間といふもの誰しも人に負けぬ氣ありて、しかも我物となれば我みづから獨り慰め、たとひ獅子ツ鼻でも鹽口でも皆それ相應に道理らしき辯解のあるもの、まして不具ならぬ以上は聊か目鼻の置所が違へばとて、何ぞ俄に戀を捨て、諦むべき、よくく取得のない醜男に生れついても無理に一箇所どこか善いところを我心に見附け出して、それを正宗の名刀と等しく眞向額に振翳しつゝ、天下の女を撫斬にせんとの勢ひ、そもくこの勇氣あればこそ、あの面でと思ふ人は世に多し、さればこゝに例の重吉も、すうくしさと自惚とに凝固つて夢が夢中となり、おのれが得手勝手の手我ま、道理に引附けて取逆上せたる馬鹿一途、あ、男振は羽織の紐にありとの名言、今この身に思ひ當つて感心仕ると澄し

込んだる體、哀れなれども本人さらに憫然ならずして日夜しきりに恐悦面を振廻しつゝ、一日人なき機會を窺つて彼の雄吉を奥庫の二階に呼上げながら、何事も粹めいたる取捌きの口上ぶり、「おい雄吉どん、さア誰も野暮つたい聞人がないから、すつかり男らしう白狀して仕舞ふさ」「なんのこつてす白狀たア」「宜いさ、萬事この胸に呑込んで承知してるから、さう隠さなくつても」「いや妙な事を、まるで藪から棒に」「藪も畑もあるもんか、こん畜生闇の夜の狸汁、人の知らない間に乙な味を遣つてるね」「は、は、は、は、重吉どん何をいふんだか、さつぱり理由が分らない」「分らない事があるものか小色の一つもしようといふ人間に似合はない、それ、例の事よ、は、は、は、は、お菊ばうの事さ、彼女、うちの嬢様が縁附くまで誓ひ華族から貰ひに来て嫌だと吐して、お菊の方といはれながら、とうくおツこちて仕舞やアがツた、しかし、あんまり人の目につかないやうにするが宜いね、とかく人の口といふもなアう

るさいから、この乃公なども近來わけて慎んで居るのさ、餘所の疝氣を頭痛に病んで嫉妬騒動をする奴が多いからな、オホン秘密々々、またこの秘密といふ奴が快樂の頂上さ、ねエお互に」

「は、は、は、何の事かと思やア馬鹿々々しい、戲談にも程があらア」「これさ、また隠すね、きのふ倉庫の前で、すツかり見届けて置いたぜ、艶書の一件を」「や、こりやア驚いた、實に結いたね、ありやア全く、さういふ理由ぢやアない外に、ちよいと」「しらぐ、しい、今更卑怯な、何を辯解するんだ、安心するが宜い、野暮に鐵火箸を突ッ込んで灰神樂を立てるやうな男でないから、しかし當分は穩かに願ひたい、もし、そツちの事が妙に荒立つとね、實ア此方にも少々さし響いて來る事があるからさ、いや、あの菊ばうは氣の宜いものよ、第一、腹の中に毒を持たない女で、は、は、は、」

なるほど、此奴いよく本性でなし、きのふ倉庫の前の一件も、おのれが自惚より全く履き

違へたる様子、この分では處女心の一筋に怖る、も無理ならず、されば我に頼みし手紙の文面も虚偽のないところ、中間に立ッてお菊が狼狽へるも道理のこと、イツそ相互のため今こ、に萬事ぶちあけて他日の過失ないやう諦めせんかと思へども、これほどまでに取逆上せたる上は、絲目の切れし奴風ふはくとして忽ち如何なる間違ひを仕出來さんも知れずと、流石の雄吉も呆れて言葉なき顔を、重吉じろりと斜に見下して、何のためか軽く肩を動かしながら目と鼻の間に聲なき笑を含みし體、本人こ、ぞ最も大得意、願はくば彼の娘に見せてやりたいといふところなれど、實は泣いたか笑うたか晴雨さらに分明ならぬ不思議の面相、幸ひに相手が朝夕見馴れたる人間の朋輩なればこそ、もし隣家の猫ならば忽ち爪を磨いで脊を丸めつ、吹掛けんかと思はれぬ、おい雄吉どん、どうだい、あのお菊ばうと、それほどの情交なら定めて乃公の方の秘密も聞いたらうね、いや面目もない、しかし今更仕方もないことさ、

は、、、、、相手が處女の一途に思ひ詰めたと来て居るから、どうも困るよ謝絶やうがなく
ツて、もはや一通りや二通りの意見ぐらゐちやアおツつかないからなア、あ、昔から能くあ
る奴だ、れるより、られる方が心苦しいもんでな、は、、、、

其三十四

今日は例に依つて月に二度目の休業日なれば、奉公人いづれも前夜より待受けたる夜明を遅
しと飛出し、主人夫婦も神戸の同業者に園遊會の催しありと打揃うて立出で、家に残りしは
東屋の本尊といはる、娘の玉と脇立の菊と飯炊の下女、勘定場の二階には雄吉が何とやら氣
分わるしと幸ひ今日の一日を骨休めの寢養生、表の戸は閉ぢながら店には重吉が獨り心に思
ふ一物あつて態と留守番役を引受けつ、まづ横町の朝湯に驅込んで商賣柄お手前のもの、
極上々舶來石鹼を一度に半分以上、その後はまた糠袋を唾と湯加減に和らけて、てかくと指

磨いたる面相、元來まッ黒の額際いよ／＼木地を現はして黒光りに艶を磨ぎ出し、湯に蒸せて
仆れざるを幸ひに歸るや否、これも手元の佛國製の上等香水一瓶の三分一惜しけもなく浴びる
ほどに塗込んで、店頭に立てかけたたる大鏡の前にゴムの如く或は伸び或は縮み倍は中腰とな
つて凡そ一時間あまりを費せし後、やう／＼おのれが心の濟みしものか、其ま、店と奥との中
の取合室に反身となつて坐しながら、我より見るにもあらず、見ざるにもあらず、彼方より
見られたいでもなく見られたくもあり、このところ中庭を隔て、お玉の部屋へ七分三分の目
の配りやう、心の働き鹽梅、また間斷なくピーオー、エーチャン、マニラのシガーを取交ぜ
て滅多無性に絶えず吹出す煙は、本人むしろ却て下を向く加減なれと、あやにく肥桶の紐通
しに似たる鼻の穴より製造場の煙突に等しく、眞直に天井へ立昇るこそ聊か心細し、中庭を
隔てし奥の一室には、本尊のお玉と例のお菊、障子のガラス越しに重吉の體を見て、ぶツと思

はず吹出さんとするを、やうく口の中で嚙殺しながらの忍び笑ひ、「お嬢様、あれ、あの様子を御覽なさいよ、なんといふ氣觸なこつてせう、まるで今戸焼の狛か素焼の豆狸に著物をきせて坐らせたやうですわ、あらまアあんなに煙草を喫續けてよく上氣せないこつてすねエ、じつと先刻から見て居ますに、穴の鼻から煙が通して御坐いますよ」「あら菊、何をいふんだね、穴の鼻といふことが」「い、え貴嬢、世間の人は鼻の穴ですが、ありやア穴の鼻で御坐いますよ、山の洞みたやうな穴ばかりが大きくつて、鼻といふなアほんの名ばかり、薄ッペらな皮が申譯に被さつて肝心の肉がありませんもの、そして奴さん、また朝ッぱらから磨いたも磨いた、よく磨き出しましたことね、うかくすると今に顔の皮を摺削いて赤肌になりますぜ、あれほどにするンでも定めて痛いこつて御坐いませうよ、ぴりりと顔中が引張り廻して」「ほ、、、菊、もう和女、お見でないよ」「見るなと仰しやツても氣になりますよ、何

だか祝はれるやうで」「嫌よ、妾は一切、見ないわ」「さう仰しやらずに、をりくちよいと見ておやり遊ばせよ、物の功德になりますからね」「あんなもの功德にならなくつても宜いわ時に菊、今日は皆、不在かねエ、誰も居ないの、大變、ひつそりしてることね」「い、え貴嬢、あの雄吉が、何だか一日の寢養生だと言つて二階に臥せて居りますから、今日こそ幸ひ、ひつぱり起して腹さんざ、いちめてやらうと思ひますが、彼奴が、彼處に、とぐるを巻いて鎌首もツたて、居りますから少々工合が悪いンですよ、どうかして、あの化物を退治する工夫は御坐いますまいか、いッそ貴嬢が此處へお呼び遊ばして、どツか遠方へ使者にやるのは如何でせう、きツと喜び返つて踊り上ツて驅け出しますよ、そら、そのあとが此方の自由、ね、お嬢様さう遊ばせよ、いくら驅摺り廻つても急に目ツからない無理な買物か何ぞの使者に追出して仕舞ふのが一の術ですよ、たいさへ、あんな薄氣味の悪い執念ぶかい奴に、あ、坐られて居

られちやア貴嬢お身の毒で御坐いますよ」「ほ、ほ、ほ、ほ、しかしまた、そんな事をすると却つて後が怖いよ」「いえもう大丈夫、あの雄吉が力瘤を入れて居りますから、過日のお手紙も、まだ返事こそ致しません、が心の中ぢやア、キツと承知して居ります、もし承知しないなぞと申しましたら、貴嬢、咽喉笛へ喰付いておやり遊ばせ、とかく男といふもなア妙に、こう構へ込んで萬事、じらすものですから、ほ、ほ、ほ、ほ、」

其三十五

中庭を隔て、障子のガラス越に此方を見ながら、本尊とお菊が頻りに何をか私語きつ、をり、聲を忍んで笑ふ風情に、哀れむべし重吉いよく取逆上せて、二時間あまりも容體ぶりし反身の端坐に五體の骨節めきくと鳴響いて痛けれど、こ、ぞ辛抱の仕どころと戀ゆるの觀念を押据ゑ、絶間なき舶來煙草の喫みつけに胸先むかくとして目も眩むかと思へど

生涯の大事この時と心得て例の七分三分に目配りの體、ますく大の得意となつて獨り心に思ふやう、あのお菊も随分と同情のない女だ、いくら氣が長いッて、おのれが雄公との戀中から割出しても知れさうなもんだ、幸ひ今日は主人夫婦も終日の不在で、外の奴等は勿論のこと居ないし、飯炊なンざア一二圓の鼻樂で忽ち往生、こんな宜い機會は又と再びあるもンぢやアない、うぬも勝手次第に雄公が寢て居る二階へ這上るが宜し、あとは嫌でも應でも本尊と我との二人、畜生、え、分らないかねエとはいふもの、相手が相手だ、なるほど今年やうく十七の無垢清淨で、しかも主従の隔てありとはいへ幼少い時から顔を見合つて来たものが、今更戀といふ奴で妙に變に俄に更まつたやうな鹽梅だから、唐突に出喰したよりやア却て恥かしさの立増るも道理、いや、その筈だ、その待ち遠い、じれつたい、手重くッて萬事が心易う出来ないところに眞價があるんだから、氣を長く辛抱しなけりやア無効だ、

其三十六

迎も叶はぬ戀に浮身を裏して、此ごろの氣も心も上の空なる重吉と、觸らば落ちん道芝の露を厭うて旅衣の袖うち拂ふが如き雄吉と、店の帳場に差對うて簿記帳を繰り返しつゝ、頻りに商品の出入を取調ぶる折しも、電話室より小僧一人飛出でながら、「重吉どん、今ね、旦那から電話が掛つたよ、その用事は、今日の夕方、道頓堀の芳春亭といふ料理屋へ夕飯を喰ひに行くから、電燈の點く時刻を相圖に來いッて、そしてね、もし旦那の行くのが遅けりやア暫らく其處に待つて居ると、わかりましたか」きくや否や重吉おもはず振返つて肩を擧めながら、「旦那から、む、旦那からだな、そして乃公にだな、重吉に來いと仰しやツたんだな、道頓堀の芳春亭、今日の電氣の點く時分、よし、しかし何の用事だらう、ねエ雄吉どん、めづらしいこつた料理屋などへ」

雄吉は心のうち、馬鹿め、どんな用事があるにしろ、同じ一家のうちで主従の間柄、すぐ口から口へ命令的に言へば濟む筈だに、わざわざ料理屋へ何しに此唐變木を呼ぶものか、わかつた、こりやア乃公のこつた、雄吉と重吉と電話の聲ちやア、ちよいと間違ひ易いから小僧め聞き違へたんだ、しかし、まさか乃公の事だらうとも言へないから、まア黙つて此奴を遣るさ、その上で分るだらうと雄吉たゞ獨り心の中に呵しけれど、重吉は一心に自己の事と思ひ込んでの喜憂こもぐ、今は簿記帳の調べも手につかず、「ねエ雄吉どん、全體、何の用だらうね」しきりに問はれて雄吉も挨拶に困り果てつ、「さうねエ、何の御用だらう、しかし決して悪いこつちアないね、わざわざ旦那が奉公人を料理屋へ呼ぶなンざア、いづれ宜いこつたらうよ、もし乃公の行くのが遅けりやア待つて居ると仰しやるほどだもの」「いや、實ア僕も、さう思つてるのさ、なるほど、聊か心當りの無いでもないからな、あ、隠れたるより顯はる、は

重吉をといはい、それこそ天晴、我子ながらも見上げた料簡との喜悅より、ともかくも事の極らぬうちは同じ奉公人の手前もありとて、今夜まづ料理屋へ呼寄せての下相談か、内々舅と婿との縁繋ぎか、や、いづれにしても大願成就、しめたりく、人の二十八は八方ふさがりの本命中宮と聞き及べど、こりや八方開きの運の神に押寄せられたりと、重吉そのまゝ、店を飛出すや否、かゝる時こそ帳場の車は却て禁物、萬事に神妙な男と思はれたき一心に辻車を呼びながら、道頓堀まで十錢と云ふを二十錢銀貨一枚の貨錢前拂ひに抛込んで急いだく、剩餘は入らぬと俄の大腹中、心齋橋筋の兩側に軒を並ぶる店頭いちく、車上より見下して、乃公が世を受取つたらば、あゝして斯うしてと、はや二代目の主人になり濟したる心地、やがて聞き及ぶ芳春亭の此方より車を飛降りつゝ、しづかに入りて東屋の店の者といへば、先刻よりお待兼ねとの返答に、南無三寶、すまぬことく、ゆるして下され舅殿と心の中に芝居めいて謝りぬ。

廊下傳ひに奥まりた一室の關際に手をついて、流石に何とやら改まりし心地、どきくんと胸打騒ぎながら靜に襖を引開け、おもはず緞らむ面を隠して額越に見上ぐれば、まちかねし東屋の主人、振返つて俄に驚いたる體、「や、重吉か」「へエ、先刻の電話で御坐いますから、も少し早くまゐりませうと心得て居りましたが、さしか、つた店の帳合で、つい、へエ」「いや、重吉、おまへが来たんだな」「へエ、お召しになりましたから私が」「む、さうか、ぢやア小僧め間違つたのだ、なるほど、重吉と雄吉、こりやア乃公が悪かつた、本人を呼出せば宜かつたに、實ア雄吉に來いと言つたのさ、しかしまア宜いから茶でも飲んで行け」あつと呆れて驚いて、赤めし顔の青くなるや否、蛇の如く鎌首もつたてながら、三角の目を剥き四角な面を傾け、獅子ツ鼻を怒らし夜具の袖に似たる唇端を尖らしつゝ、暫し無言の體、果は木の空より落ちたる白痴の如く半泣の澁面に、やうく重き口を開きながら、「へエ、私ぢやア御

坐まいませんので、へエ、雄吉ゆうきちどの事ことで、へエ、とんでもない間違まごひを致いたしまして、何なんとも申譯まうしわけのないことことで、しかし何か私わたしで濟すまない御用ごようでも御坐ごまいますか」「さうさ、おまへでは少々せうせう困まるね、まアその事ことは別べつとして、時ときに重吉ぢゆうきち、幸さいひの折せりだから言いふがね、おまへ此このごろ、どうか仕しちやア居ゐないか、何なんだか近來きんらい、妙めうに變へんだぜ」「へエ、恐おそれ入いります」「恐おそれ入いりますッて、わかッてるのか」「いえ、わかりかねますが」「馬鹿ばか、わかり兼ねる事ことに恐おそれ入いる奴やつがあるか、第一だいいち、ろくでもない其面そのつらを見みッともないテカ〜と光ひからして、落語家はなしかの前座ぜんざが色目いろめを使つかふやうな身振みぶりでさ、いやに澄すまし込こんで氣取ききッた工合ぐあひ、二目ふためと見みられたもンぢやアないぞ、自分じぶんは兎も角かく、店みせの體裁ていさいが悪いから以後いご、たしなむが宜いい、馬鹿ばか々々くしい」「へエ、恐おそれ入いります」「全ぜんくのこッた、それこそ恐おそれ入いッて慎つしむが宜いい、去年きょねんごろまでは、さうでもなかつたに、近來きんらいしきりに變へんになッて來きた鹽梅あんばい、もし人ひとにいはれない放蕩だうたうでもしてしてるのぢやアないか」「否いなどゞど

う致いたしまして、左様さやうな事ことを」「無なけりやア、結構けつこうだ、商賣人しょうばいじんの手代てだいは手代てだいらしく、どこから見ても、野暮やぼに堅かたく見みられるのが却かえッて花はなだ、よく氣きをつけないと身みのためになららんぞ、それは先まづそれとして重吉ぢゆうきち、今いますぐ家うちへ歸かへッて雄吉ゆうきちに此家このこまで來こいと、さう云いふんだ」「へエ、」「ぐづぐづせずせずに早はやく起たたないか、急いそぎの用ようだから」「起たちます、只今ただいま、へエ、ぢやア私わたしに御用ごようは御坐ごまいませんので」「おまへの用ようは、早はやく歸かへッて雄吉ゆうきちを此家このこへよこすのだ、そして、今夜こんやア少々せうせうおそくなるかも知れないッて、家内かないへ言いふんだ、宜いいか」「よ、宜よろしう御坐ごまいます、もし雄吉ゆうきちがまゐりかねます時ときは、急病きふびやうとか何なんとかで」「馬鹿ばか念ねんを押おすに及およばない、乃公おれが來こいと呼よぶんだ」「へエ」

其三十八

行く時ときは天てんへも昇のぼる心地こころして踊まりあがりしが、あはれや歸かへる時ときは地ちの底そこに引ひ入れらる、心地こころ

して泣くにも泣かれず、しをくくと芳春亭を立出づれば、まだ其邊を去らざりし先刻の辻車かくと見て走來りつ、十錢の懸直を倍にして二十錢くれし馬鹿客、おのれ遡してよいものと頻りに追從輕薄を進められて重吉ますく腸を沸返らせ、えッ畜生、いらぬと睨めつけて或橋を渡る時、背後より不意に來りし獨逸種の大犬に驚き、はッと飛退く途端、足を踏江らして下駄の鼻緒ぶつりと切りぬ、あ、やつぱり二十八の本命中宮、八方ふさがりどころか十方ふさがりとぞ歎じぬ、橋の袂に八錢といふ辻車、やうく六錢に値切り落して悄然と乗りつ、店に歸るや否、何心なく新聞小説の挿繪に見惚れて餘念なき小僧の横面ぐわんと喰はしぬ、「やい先刻の電話を何と聞きやアがッた、この素丁稚め」をりしも居合したる雄吉おもはず起ッて其拳を捉へながら、「これさ、何をするんだ」「おい、なぜ止めるのだ」「なぜッて、罪もない小僧を不意に擲りつけるからよ」「なぐッても宜い奴だ、此奴め、いつも横著をしやアがッて、ちッ

とも物事に氣を止めないから間違ひが出来るんだ」「何の間違ひか知らないが、出來たもんなら仕方がない、よく以後を言聞かすのさ、ぶツちやア不可、むやみに」「いや、この小僧ばかりぢやア腹の蟲が承知しねエ、癩癩の起ッた時は誰でも構ふもんか、おい雄吉どん、氣を附けなよ、この拳固の振廻し鹽梅で、どこへ當るかも知れないから」「や、危険々々、しかし旦那の御用は何だッた、もう済んだのか、大變に早かつたね」「へん早からうが遅からうが大きいに御世話さま」「こいつア驚いた、どうやら俄に雲行が變ッて來たな、は、は、は、」をりしも電話室の呼鈴に雄吉おもはず耳を欬て、そのまゝ、走入りて「どちらから、はい、その通り東屋ですよ」「乃公だがね、おまへ誰だ」「おや旦那ですか、私は雄吉です」「さうか、あのウ重吉はまだ店へ歸らないかな」「はい、只今歸ッて來ました」「重吉から、まだ何とも聞かないか」「いえ別段、ほんの今、歸ッたばかりです」「そいぢやア、もう聞くに及ばないから、

運だめしに乗るか反るかの一六勝負、やっつけようかと思ふのさ、しかし、それに就ては是非、是非とも、おまへの素性なり身分を打明して貰ひたい、人間にやア飽くまで惚れ込んだが、まだ其邊の實際を聞かないからね、勿論、乃公から取調べようと思やア今日の時勢だもの、いくら隠したって無効だ、すぐ分るがね、今年の春、何だか仔細あり氣に問うてくれるなど言つたから、乃公も元來の變物さ、ぐつと其ま、呑込んで、本人に知らさず餘所ながら調べてみるなんていふ、そんな事もせず、今日まで黙つて居たのは餘程おまへを買つた心意だぜ、しかしどうだい雄吉、もう打明けても宜い時分だらう」「いや段々との御言葉、わけて今春以來、一方ならない御恩をうけました奉公人の私が、その御主人に對して、まだ糞片意地を張りましちやア、實に何とも申譯のない次第で重々、恐れ入りますが、どうか今、暫時、なアにも、聞くに及ばないと仰しやつても、此方からは非お願ひ申して聞いて戴く時が御坐いますか

ら」「ちやアまだ其時が來ないといふんだね」「まづ、まづ、左様で」「よし、そいぢやア其事を扱置いて、今いふ乃公が乗るか反るかの一仕事、おまへの考量で實際に何と思ふ、腹藏なく意見を吐いて見てくれ無遠慮に」「素性も分らない青二歳の私へ、それほどまでの仰せ、ちと生意氣な事で御坐いますが、いはゆる知己の恩に感じて、忌憚なく申上げます」「おもしろい、きかう、どうだね」「私が持論、などと申上げては甚だ失禮で御坐いますが、二三年前から獨り心で考へて居りますにやア、およそ人間といふものは種々さまざまの業を執て其境遇なり嗜好なり性質なり主義なり是また千差萬別ですが、何の業にも必ず有形の盛衰消長と無形の利害得失とが相伴うて、進まざれば退き退かざれば進むといふ工合で、逆も一定の場所、いはゆる或點に固著して居ない以上は、日夜また間斷なく動いて居るものと心得ます、その日夜に間斷なく動くといふは則ち日夜に間斷なき盛衰のある所以で、この日夜の小盛衰が積

り積つて竟に總勘定差引の大盛衰ともいふべき時が、つまり人間の生涯に於て只の一度、乗るか反るか浮沈の大關接、大變動機かと思ひます、しかしこの大變動といふものも、また其人の境遇と意志に依て大小輕重の差別が御坐いますから萬人一様には申せませんが、自然の數理上、必ず招かすとも來るべきもンかと心得ます、ひらつたく申上ぐれば人は生涯に浮沈の運といふ奴は必ずあるに極つたもので、たゞ其運が其人に依て大小あるのみ、乞食は乞食だけの運の頂上に達する時節もあつて、かうも貰ひ物が澤山ぢや喰切れないと思ふほどの時は一度きつとあるもので、また商人は商人それ相應の人物と身代に應じて、いやはや案外の利益に我みづから我に驚くといふやうな時代があるに相違ない、たゞ其運の時節到來した間一髪の機に乗じてこそ、空拳で百萬の富を掴む奴もあり、また遺損つて逆落しに落ち込む奴もあり、は、は、は、は、こ、こ、こ、が人間盛衰の總勘定なかくむづかしい呼吸ですな」む、なるほど、

ぢやア運といふ奴の來るのを待てといふんだな、乃公にやアまだ乗るか反るかの時機が來ないといふんだな」まづ、左様で、つまり、さう慌て、此方から驅け出さなくつても、いづれ其うち先方から運の奴めが不意に押掛けて來ますから、その時を待つて生涯一度の大勝負を遊ばす方が、却て宜しいかと存じます、しかし伺ひますが、先刻仰しやつた運だめしといふなア、もしや株とか米とか投機の事で御坐いませうな」さうだ、店の商品は勿論、家ぐるみ引提げて一番、やつて見ようと思ふのだ、ぐづ／＼して生きて居るだけぢやア、さつぱり面白くないからね」いけません、およし遊ばせ、甚だ失禮ですが、一切ひツくるめて二十萬前後で御坐いませうね」む、よく見た、まづ其邊、違ひなしの中央だ」ぢやア猶更の事、どっち附かすの二十萬ぐらゐぢやアいけません、單に衣食住といふ方面から二十萬といやア大金ですが、凡そ富といふ方面からア鼻糞金ですもの、は、は、は、あ、して神妙に店賣の御商賣

金、こいつ頗る投機に取ツちやア難題の數で、もしこゝに百萬前後もあればですが、なまなか二十萬「ちやアその二十萬を始めより無い物として、あらためて裸一貫の空拳で」「いけません、なぜと申しますに、天下の富から見ればこそ鼻糞の二十萬圓、また一時間に幾百萬の勝敗あるべき投機から見ればこそ端金の二十萬圓ですが、今日こゝに一個人の二十萬圓としちやア我國近來の統計上、平均およそ二萬三千餘人に對して一番より三番までに數へらる、財産家ですから、しかもその二十萬圓が一朝不意に轉け込んたでなく、あゝいふ手堅い御商法から多年の功に依て出來た以上は猶更の事、また御年輩と申し、もはや宜しいちやア御坐いませんか、忌憚なく申上ぐれば、貴方が生涯に得べき運を一時の總勘定で取らず、ちく／＼月賦か年賦にお取りなすツたも同然、もう運の殘額が大して遺ツちや御坐いませんよ、それよりやア此ま、無事に、何の浪風もなく、足るを知ツて人生の平面を御散歩なさる方が

却て宜いかと心得ます、失禮ながら人の五十は日暮れて途遠しといはいふべき年輩、しかも唯お一人の嬢様で、外に財産を分與すべき男の御兄弟が澤山あるといふちやアなし」「む、なるほど、さういへば、そんなものだね」「全く御坐います、もし一朝、やり損うた曉は、御自分こそ覺悟の前の御承知でせうが、折角こゝまで來て何も御存じなく唯、安心なすツてる細君や嬢様が堪りませんよ、しかし貴方に對して斯うは申しますもの、私は、この雄吉は野中の一本杉、今に時機を得たらば枝も根も葉もひつくるめて一時に、ぱつと燃す心算で御坐います、は、は、は、膽魂一つの丸裸からでも宜し、また百萬圓を擲んで掛ツても宜し」「丸裸は宜いが、その百萬の資本はどうして」「いえ別段、大した心配もなく、生涯一度の運に向うて戦を挑む前、ちよいと下稽古の小手しらべに捻取ツて見る覺悟で御坐います、は、は、は、いひつ、鼻の頭に小皺を寄せて煙草の煙はつと吹けば、さすがの主人おもはず其煙

に巻かれて驚きながら、「おい雄吉」「へエ」

其四十一

五體に張切つたる膽魂へ二十萬圓を添へて一戦を試みんとする我を諫めながら、その二十萬の半分を飾りし店頭に立働く青二歳の身を以て、百萬圓の資本を下稽古の小手しらべに捻り取るといふのみか、鼻に小皺を寄せて冷かに笑うたる雄吉が面魂に、あつと呆れて暫し無言のまゝ、其顔を見詰めしが、流石に晩年の一相撲とらんとする東屋の主人、がらりと打つて變つて、またもや思ひもかけぬ別問題を持出しぬ、

「よし、それぢやア其事は、なほ一考するとして置いて、時に雄吉、また唐突に變な事を聞くやうだが、おまへ、いつごろ妻帯する心算だ、幾歳ごろに、どういふ女を妻に持つ考へか、試みに聞かしてくれ」「いや、どうも妙な事を、なるほど私も生涯無妻主義で通すとい

ふでも御坐いませんから、いづれ持ちますが、只今、ちよいと申上げかねますな、第一この縁といふ奴が、また先刻お話し申した運と同じことで、多くは豫想外、意外、案外の結果で或點から見ますと殆ど人力の外ですからねエ」「なるほど、しかし、そりやア實際の結果論で乃公の聞くなア其豫想さ、かういふ女とか、あ、いふ女とか、つね々々心に思つてる雛形があるだらう」「は、は、は、困りましたな、別段そんな手本にする女も見當りませんが、誰も同じ事、まづ自分に相應の女が」「さアどういふ相應の女だ」「おのれの境遇に適當すべき女です、もし大業にいへば、この良人にして此妻あり斯妻にして此良人ありといふやうな工合で過ぎたるも望みませんが、また及ばざるは猶更以ての御免、つまり自分の地位と力に適當する女が欲しう御坐いますから、なかく容易に娶りませぬ、もしこゝに大阪第一の美人で才學ともに秀でた淑女といはるゝ女でも、今この私に呉れるといやアちよいと一考いたしますね、

當 三人兄弟後編

其 一

世には土の釣鐘、叩いても音のせぬ奴はあれど、これこそ腹に音のある男、うてば忽ち鳴り響いて面白き一節ありけりと、東屋の主人いよく雄吉に惚込みつゝ、いはゞ我身の帷幄に引入れて参謀にせんと思へども、店の商用外は一切さらに避けて應ぜぬ體、大阪市中の美人相場は狂はすかとまでいはるゝほどの娘に此身代を添へて養子にせんと試みしが、それをも耳にかけずして空を嘯く體、果は餘りの事に小面憎けれど、さて面憎い大言を吐くにも似ず平生の小心翼々、しかも慇懃にして愛敬ふかく、言葉數が少うて仕事の早業、どうしても此奴たいの鼠ではないとぞ睨みぬ。

こゝにまた例の重吉は、芳春亭の失敗以來、宛がら木の空より落ちたる小猿の如く、俄に驚ぎ込んで更に顔色なく、三日三日は頭痛と疝氣と腹痛と一時に込合うたりとて店二階の一室に夜具をかぶつて打臥せしが、何をか思ひけん、また忽然きよろゝと起出でて横町の湯屋と床屋に通ひ始め、石鹼と香水に自己が五體を攻立て、の一生懸命に、さては奴さんまた勇氣を盛返したかと雄吉が心の中の呵しさ、お玉とお菊は互ひに顔を見合せながら、いよく薄氣味わるけの眉を擧めて鶴龜々々七里結界とぞ呟きぬ。

寝ると喰ふとを兩天秤にかけて、いづれか重い輕いとは一般の奉公人が首を捻るべき難題、されば枕に就くや否、忽ち死人の如くなつて鼾聲雷を欺く夜の一時ごろ、何とやら寝られぬまゝの重吉おもはず首を擡けて溜息を吐きながら、隣りに枕を並べし雄吉を揺り起しぬ。お

い、おい、おい、おい、おい」「む、ウ何だ」「おい雄吉どん、ちよいと目を覺ましてくれないかし
「え、うるさい何だよ今時分」「別に用もないがね、どういふもんか、さッぱり寝られなくッ
て淋しいんだ」「馬鹿な事をいふもんだ、自分が寝られないッて人の安眠を妨害する奴がある
か、これさ、よせといふに、さう耳を引張ッちやア困るよ」「だから、ちよいと、ほんの暫時
で宜いから」「や、とうとう目を覺まして仕舞ッた、馬鹿々々しい、もう一時過だらう」「そん
なもんだらう」「時に雄吉どん、妙な事を聞くがね、全體、うちの旦那ア、あの嬢様を可愛が
ッてるかね」「つまらない、寢惚けちやア不可ぜ、親子ぢやアないか」「いやさ、親といふもな
ア、自分の子の無理を、どのくらゐの無理まで聞くもんだらう」「おい、よしてくれ、何をい
ふのかと思やア馬鹿な、さう物事の方角を取違ッちやア死目に近いぜ、醫者の家へ奉公替で
もして養生するが宜い、無効だぜ重吉どん、シツかりしろへ、呆れて返答が出来ないよ、は

は、は、は、は」「いや、さう笑ッたもンぢやアない、いくら利口な男でも、この道はまた格別
さ」「どの道だ」「どの道、どの道たア少々なさけない、此ごろの僕が心中さ、わからない人間
だねエ」「いよゝゝわからんな、君の心中に全體どんな新道が出来たんだ」「畜生、知ッて居な
がら、わざと、じらすんだな人を」「こりやア困ッた、どこの白痴が夜中に睡い目を覺まして
わざゝゝ人を、じらすもンかね」「ぢやア眞面目に聞くが宜い、そら本尊の事よ、お玉さんの
こッたよ」「お玉さん、うちの嬢さんかい」「當然よ、その嬢さんがね、實ア此ごろ、僕に」「ふ
む、君に」「どうやら變さ、たしかに其證據もあッたし、また手應へが届いて來てるんだがね、
何をいふにも今年やうゝ十七、親の目からは小供同然で、少しも御存じのないところが却て
僕の大に苦しむところで、つまり早く知れた方が面白いのさ、一粒種の愛嬢が、それほどま
でに思ひ込んでもンなら、いッそ、とか何とか埒の明きやうが早い心算だがね、もし萬々一、

店の奉公人など、いふ大騒ぎになつた曉は、どうしたもんだらう、そこで僕が聞くのさ、親
 といふもなア可愛い自分が娘の無理を、どのくらゐの無理まで聞き届けるかと」「おい、
 どうか止してくれ、後生だ、お願ひだ、眞平々々、また明日の朝あらためて相談に乗るか
 ら、しかし重吉どんお染久松は悪いこつたぜ」「だって、今更、仕方がないぢやアないか」「い
 や、わかつた、わかつた」「おい、寢て仕舞ツちやアいけない、さう藻潜り込むと夜具を
 引ッペがすぞ」「ぐうぐう、これは躰聲で御坐い、ぐうぐう」

其二

片思ひに狂ひし戀の奴唄、うはの空に氣を取逆上せて、たゞいつまでも其日の風次第、ふは
 くとして迷ふのみかと思ひの外、ゆうべの夜半に我を揺り起して恥かし氣もなく語りし言
 葉を思へば、正しく本心を失うて叶はぬ戀に一命をも捨てかねまじき勢ひ、しかも目色を變

へて凄じき顔色、あのまゝに打捨て置かば彼奴いかなる事を仕出來すやら危しく、白痴の
 一徹と戀の一心、失戀の怨恨ほど世に怖ろしきものはなしと、さすがの雄吉も驚き呆れて果
 は物の哀れを催しぬ、

その日の午後二時ごろ、例のお菊が裏の空地に張物板を押並べて、しきりに立働く折しも雄
 吉たゞ一人、ふらりと店より入來りて、「やア酷く精が出るね、しかし大抵にするが宜い、あ
 ンまり稼ぎ過ぎると却て身體の毒だぜ」「おや、めづらしいこと雄吉どんのお世辭を始めて聞
 きましたわ」「乃公の世辭が、は、は、は、時にねお菊どん、人の疝氣を頭痛に病むやうだが、近
 來、あの重公なかく、物凄しい勢ひだぜ、用心しないと不意に飛付いて喰殺されるぜ」「おいて頂
 戴、あんな唐變木に喰殺されるくらゐなら横町の犬に喰はれて死にますわ、馬鹿々々しい、指
 でもさ、して堪るものか」「いやさうでない、まづ彼女を取殺した上、お嬢さんをお突くとか斬

るとか言ッてるぜ」「おふざけなきんな、折角のお天氣が曇りますよ」「決して戯事ぢやアない本當のこつた、しかし源因を糺せば第一に和女が悪いんだから」「なぜ、なぜ妾に罪があるんです」「なぜって、あんな馬鹿一途の自惚に戯弄つたからさ」「いくら此方が戯弄つたつて、物には凡そ權衡のあるもんだから、よく自分の胸に相談して見るが宜い、あの御面相で誰が、馬鹿々々しい、人間並の本氣沙汰に受けるのが呵しいんですよ」「しかし現在、本人が本氣で居るから仕方がない、何とか今のうちに工夫して、無事に諦めさせないと、おい大變だよ、それこそ全く間違ひが出来るぜ」「實は其事ですよ、過日から妾が度々いふ通り、お嬢様が貴方にお頼みなさるんぢやアないかね、もしもの事があつてはと思つて」「ところが、いくら頼まれたつて、その間に何の關係もない者が手の出しやうは無いさ、勿論、かけながら心配はして居るもの、」「かけで心配ばかりして貰つても、何にもなりませんわ、もし今の談話が本

當なら猶更の事、どうかしてあけて下さいな、お嬢様がお可哀さうだから、それとも雄吉と、過日あけた、お嬢様から御依頼の手紙を取ッ放しにする意志ですか、この罰あたり奴」「罰あたり」「はア、罰あたりだわ、人が狂氣になるほどと思つても、嫌がツて見向きもなさらないお嬢様に、お瘦せなさるほどの物思ひをさせながら、勿體ない、この罰あたり奴、女冥利に盡きますぜ」「おい、つまらない事をいふもんでないよ、しかも大きな聲で、もし人が聞いたら、どうする心算だ、はア分ツた、こりやアまた重公と同じ術に乗せるんだな、わるい癖だ、よくない性分だ、あとで困りこそすれ、何の爲になるんだよ、第一お嬢様に濟むまいがね」「おや、いろく」と今更後れ馳せの御意見、ありがたう御坐います、いづれ其中きつと御禮を申しますよ、人を立てごかしに倒して置いての遁口上覺えておいでなさいよ、突くの斬るのといふ唐變木の一念より、女の一念どれほどの効果があるか」「おいくさう慣らわ

「ちやア聊か困るよ」「聊か困る、へん聊かぐらゐの困らせやうで承知しますものか、御本人のお嬢様は兎も角、この妾が」「これさ、お菊どん、何も喧嘩しに來たンぢやアない、重公の一件に就いて、ふと思ひ當る事があるから、注意するンだよ」「ですから御芳志を有難いと言ッてるぢやアありませんか、わからない人だね」「や、困ツた、そいぢやアまた出直して來よう、考へ直して來るからね」「あれ、ちよいと、あれ雄吉どんてば」

其三

一日の朝、雄吉が何心なく新聞を手にとつて見れば三の面の雜報欄内に澤田雄藏氏の來阪と題せる一項、はつと思つて讀み下せば、

一個人の資力を以て鞏固なる五會社を専有し従うて其勢力は暗に東京の經濟界を動かすに足るべき彼の澤田雄藏氏が今回當地の商況を觀察せんがため一昨朝の一番列車にて來阪

し凡そ一箇月間滞在の上何事か細密なる調査をなす由また當地の紳商は氏を招待して盛なる歡迎會を催し席上その觀察に就ての批評的演説を乞ひ兼て噂ありし如く東西の紳商が相通じて相互の利益を圖らんとする京阪共通會なるものも亦この際に氏を要して是非とも設立せしめんと頻りに奔走中の由なり、

さすが懐かし氣に同じことを幾度か繰返して、雄吉おもはず膝を組み直しつゝ、俄かに沈思黙考の背後より不意に主人が聲、「おい雄吉、いつにない何を考へてるンだ新聞を見て、めづらしいコツても出て居るかね」「いえ別段、おもしろい事も御坐いませんが、ちよいと、こゝに「ちよいと、そこに何かあるね」「東京から澤田とかいふ人が來るツて、大阪中の紳商連が頻りに騒いでる様子ですが、馬鹿々々しいぢやアありませんか、とかく大阪の人間は個人的に落著いて居ますが團體的に慌て、空騒ぎをやる癖があるやうですな、どれくらゐ、えらい男

だつて、なアに逢つて見りやア格別、来て見ればさほどでもなし富士の山とかいふ狂歌の通りですからね、しかし庭が廣くつて立派にしてあると、自然の時候に咲いた春の花も其家の主人が一人の力で咲かしたやうに見えますから、またさう思ふのが世間普通の人情ですからな、は、は、は、全體この澤田といふなア、どんな男でせう」「其人か、そりやアおまへ東京で有名な大紳士さ」「へエ、どうで御坐います、貴方も其歡迎會へお出でなすつちやア、つまり戯弄半分で、もし氣に入らない事がありやア、脚下の血が頭の天頂へ上氣せあがつた大阪中の化物を見物する覺悟で、は、は、は、こんな事へ眞面目で出ちやア癢に觸りますからな」「やひどい事をいふ、まさか」「なアに貴方、これくらゐの料簡で出るのが當然です、生意氣な事を申すやうですが」

日本第二の都會を丸呑にして咽喉にも觸らぬほどの大法螺を吹き立つるかと思へば、忽然また結界の中に飛込んで頻りに算盤玉を弾きつ、何圓何十何錢何厘といふ勘定に謹んで餘念なき體、いかにしても不思議な奴、なんとしても奇怪な奴、此奴こそ化物に相違なしと、さすがの主人も呆れて今更見詰めながら、また此方を振返れば例の重吉ぼつねんとして腹鼓を打損ねたる秋の夜の狸に似たり、「おい重吉、おまへ過日俄に病氣だと言つて三日も寢込んで居たが、どうだ、もう宜いか、全體なンの病氣だつた」「へエ、少々頭痛が致しまして」「本當の病氣なら仕方ないが、よく氣をつけて働かんと不可ぞ、第一が自分のためにならないから」「いえ旦那、全く、本當の病氣で」「いやさ、別に假病とも何とも言つちやア居ないよ、しかし一心に勉強しろといふんだ、いつも乃公は不在勝で、よくは知らないが、近來どうも怠けるやうだぜ」「へエ、決して自分ぢやア怠けると、思つちやア居りませんが」「屁理窟をいふに當らない、そして過日芳春亭へ間違つて來た時、言つて聞かした事を忘れるな、男の癖に

べろんくと見苦しい、少しは自分の身を顧みて慎むが宜い、なんだ馬鹿々々しい、女の腐ッ
たやうに嫌味ツたらしい風をして、しツかりしろ、ぐツと氣を利かして、萬事てきばきしろ
男らしう、よく、きまりが悪かアないね」「恐れ入りました」「恐れ入るばかりぢやアいけな
い」「へエ」

其四

父の澤田雄藏が來阪せしと聞くより、眼を光らして雄吉いちく、其後の新聞雜報を見れば、
いはゆる他の紳商なるものと異なりて社會公衆の表面上に奔走するといはんより寧ろ自己が
一手専有の五會社に身を委ねて、その名こそ東西に鳴響けど多年かつて他國へ出でし事なけ
れば、一入さらに大阪紳士の珍客とせられて、會社の招待、銀行の懇親會、製造所の宴會等
に日々の進退舉動いちく手に取る如く、しかも近來希有の歡迎に逢うて殆ど忙殺せらる、

體に、雄吉も蔭ながら人しれぬ心の快樂、せめて一目、今このまゝの姿にて不意に尋ね行か
ば、嘸や打驚いての親心、狂せんばかりに我手を取るべしとは思へども、いやまで、いまだ
時機いたらず、しかも我父ながら世間尋常の男と違つて萬事に脱からぬ周到緻密、いかなる
筋を傳うて今こゝに我身のあるを知るやも圖られず、もしそれならば慌て、笑はれんこと父
の手前は兎も角も、二人の兄に對して面白からずと、たゞ其日々々の新聞を見て獨り心を慰
めぬ、

父が大阪に來りしより十二日目の新聞紙上、澤田氏の宴會謝絶と題して、流行の感冒に犯さ
れしがため、一切の訪客にも接せず旅館の一室に閉籠れるよしを、雄吉みるや否、おもはず
片頬に笑を含んで膝を打ちながら、や、さうだん、老父の本色いよく、現はしたぞ、元來
うまれついでの強壯健全、乃公の仕事は文明的で身體は野蠻的だと平生の一本調子に自慢す

るほどの父、さては無用の面會を避くるがための方便と思ひしに、それより三日目の新聞紙上には、感冒より大熱を發して關西病院へ入院せしとの記事に、さすがの雄吉はツと驚いて目を見張りぬ、

うまれて六十二年の今日まで、醫者と怠惰者とは大の禁物、我もし閑を食るに至らば心すでに老いたり、我もし醫を招かば死に近しいひし一言、今更雄吉の身に電氣の如く感じて打驚きつ、竊に車を驅つて關西病院へ馳せ行き、さる紳士の名を騙りて其使者と稱しながら、わざと受附の人を頼んで大體の病狀を問へば、別段さしたる事はなく、たゞ一時の感冒に聊か念の入りしものと聞いて、やうく打騒ぐ胸を撫下しつ、門を出づる時、おれが一等室の窓といふに思はず仰ぎ見て、しばし茫然と立停まりぬ、

まづは安堵、されど老體、いかに元來の強壯とはいへ、此後の養生專一と、心に念じつ、病

院の門を出でて、待たせし車に乗らんとする時、思ひもよらぬ例のお菊が横町の辻より見附けて小走りに走せ來りぬ、「おや雄吉どん、この病院へ何の用で、誰か入院してる方があるんですか、貴方の知つてる人で」「いや何、ちよいと、この藥局へ店の物を賣つたから、それです、時にお菊どん和女また、どこへ往つたのだ」「お嬢様の御買物で、つい此邊まで、しかし宜いところで逢ひ申しました、さア過日の返答なさい、あの、お手紙を、あのま、取ッ放しですか、酷いよ此人は、もし返事が出来ないなら、お嬢様からあけた手紙を戻して下さい、無暗に取込むと盜賊ですよ」「え、また馬鹿な事を言掛けるよ、おい車夫、急ぎだ、さア急いだぐく」「これ車夫さん其人に用があるんだから待つて下さい」「かまはないぞ車夫やれくありやア女狂氣だ」「おや、狂氣、狂氣たア雄吉どん」「何、さうぢやアない、今、病院の女關で暴れて居たなア女狂氣だと言つたのさ」

浮世を敵にうけての客足たえずして店頭の合戦せはしきに似もやらず、中庭を隔てし奥の一室は天の岩戸の別世界、うすめの命めいたる菊が頻りに笑を含んで、本尊のお玉大明神を勇め奉つる私語低聲、「ですからお嬢様、も一度お手紙をおやり遊ばせ、なるほど一度ぢやア貴嬢、すぐに返事も致しかねませうよ、それも外に何か委しい事でも書いてあればですが、ただほんの、あれだけのこつてすから、まして主従の間柄ですもの、いくら心の中ぢやア嬉しくつて堪らないでも、そこは男の癖で、負借みの強い、なか／＼意地癖の悪いもんで御坐いますよ」「だって、何も外に、書くことがないもの」「何ですよ、お氣の弱い、無いと仰しやれば、それまでですが」「ほ、／＼、／＼、ソレな無理な事を、無いから無いといふんだわ」「ぢやア無いに遊ばせ、しかし先達のお手紙ね、あの通りで宜しう御坐いますから、も一度、い、

え今度こそ貴嬢、きつと返事を、よこしますよ、實は過日も妾が裏の空地で一生懸命に張物をいたして居りますと、そこへ雄吉が、ふいと來まして、あの才植の事を先方から言出しましたよ、何だか此のころは俄に上氣せあがって變になつてゐるから、用心しないと取殺されるかも知れないなんて、戲談半分に言ひますから、ぐつと一本つつ込んでやりましたの、それほど氣が附いてる癖に何故お返事をあけない、もし嫌なら嫌で宜いから先達の御手紙を今すぐ返せつて」「おや、さう、それでは全く、少しは心配してくれてるんだねエ」「ですとも貴嬢、口でこそ言ひませんが心ぢやア、どれほど嬉しいか、喜んで心配して居りますさ、そこで猶更ら、も一度お手紙をおやり遊ばせ、もう／＼重吉といふ名を聞いても嫌で／＼薄氣味が悪くつて堪らないのに、此のころは猶更ら妙な舉動が見えて怖くなつたから、萬事おまへに宜しく頼むつて、かういふ鹽梅にやつて御覽遊ばせ、それこそ、いくら眞面目な顔をして居ても無効

です、きつと今更らのやうに驚いて何とか彼とか言ッて來ますから、其時、これまでの敵討に、さんざつばら油を絞ッて、ぎゆうぐいはしてやりますよ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、菊は人が悪いよ、そんなに、いぢめなくッても宜いぢやないかね」「おやく、これは失禮、もう貴嬢、いつの間にか雄吉に御味方遊ばして妾を、貴嬢こそ、お人が悪う御坐いますよ、もし貴嬢と雄吉が今更ら妾を邪慳になさいますなら、よろしう御坐います、妾は重吉に返り忠して裏切をしました上、どこまでも妨害を致しますよ」「あれ、さう言ッたのぢやアないに」「ほ、ほ、ほ、戯談は儲おいて、今の御手紙は是非、も一度おやり遊ばせ、なアに貴嬢これが萬々一、御兩親に知れたッて大丈夫、生いやらしい文句があるぢやアなし、あの重吉の舉動が怖いから頼んだのだと仰しやれば何事も御坐いませんさ、そのみならず、雄吉はね、お嬢様第一に旦那様が惚込で在らッしやるんですもの、委しうは聞き取れませんが一月ほど前の夜

御兩親の間で何か雄吉の事に就て頼りに譽め合ッて在らッしやツた事を、ちらと妾の耳へ「虚偽、うそ、そんな事を言ッて、おまへ妾に戲弄ふんだらう」「い、え本當、なに貴嬢、虚言を申しますものか、もし虚偽と思召さば、何氣なく機會を見て、お父様に聞いて御覽遊ばせ、店中で誰が一番お氣に入ッてますかと」「そんな事が聞かれるものかね、すぐ叱られるよ、餘計な事を問はなくッても宜いッて」「ぢやア、おッ母様にお聞き遊ばせ」「猶更ら變だわ」「それでは仕方御坐いませんよ、妾の申すことを本當になさらないと」「ほ、ほ、ほ、ほ、ほ、菊は、氣やすめばかりいふから、確的になりやアしない」

其六

花の色香しきりに我袖を引かんとすれど、いそぐ旅路に振り返る暇なければ、雄吉たゞ空ふく風の如く氣にも止めざるのみか、此ころは父が來阪せしとの新聞紙上に猶更ら脇目もふらず、

まして病院に入りしとの記事に打驚いて、よそながら問ひ試みつ、やうく安堵せしもの、
わけて其後の新聞に心を注ぎしが、入院せしより七日目の紙上に澤田雄藏氏危篤との一報あ
りける、

本月三日以來當地に滞在せらる、彼の澤田雄藏氏が突然感冒に犯されて關西病院に入り
しが其後の経過頗る案外の結果を呈して一昨夜の如きは一時殆ど人事不省の重患に陥り東
京より電報に驚いて來阪せる澤田家の一族は勿論、氏が専有に屬せる五會社の重なる社員
及び平生懇親の人々以上四十餘人が詰切りて交々看護に油斷なけれど本年六十二歳の老體
にて何時いかなる激變の來るやも圖られず就ては當地の紳商連も續々見舞に出掛けて病院
の玄關へ別に澤田家取次所なる假受附を設けしほどなりとぞ嗚呼この實業界の一老雄をし
て折角の來阪に萬一の事あらしめんには澤田氏其人よりも寧ろ當地の面上目に關して遺憾

なるべし、

はツと打驚いて南無三寶、今は我こ、に瞬時も安閑たるべからずと、その新聞を手引引ツ握
みしま、店より奥へ飛込めば、をりしも主人夫婦と娘の玉と三人打揃うて朝の膳に對ひつ、
お菊が此方より給仕せる體、雄吉おもはず兩眼に涙を含んで聲を曇らせながら、「甚だ突然で
御坐いますが、只今より雄吉お暇を願ひます」

夫婦は更なり、お玉も、菊も一時に驚き呆れて其顔を見詰むれば、はや兩眼に溢る、涙を押
拭ひながら、手に持てる新聞を主人の目前に差出して、「その一節を御覽下さい、その、その
澤田雄藏と申しますが、實は私の、父で御坐います」

主人一讀の下に思はず容を更めて目を見張りながら、「えッ、この澤田氏が」「はい、私は其
三男で澤田雄三郎、聊か志あつて昨年冬、無斷で東京を飛び出したま、今日まで」

きくや否、主人いよく、驚いて箸を抛ちながら、俄の大聲張り上げぬ、「おい小僧、店のもの、誰でも宜いから早く車を、綱ツ曳だく、跡押でも構はないから早く呼びにやれツ」また忽ち此方を振向いて何事かと驚く妻子を吐りぬ、「え、何を馬鹿め、ぐづくしてるんだ、著物を出さないか、乃公のを著せるんだよ馬鹿」また忽ち雄吉に對うて、「さア早く、お著替なさい、まさか其ま、ぢやア、定めて澤山いろんな人達が来て居ませうから、これ玉、おまへでも宜いから早く著せてあけないか、菊、きさま何を茫然してるんだ、小僧の後おツかけて車を急いで来いッてば」

雄吉が俄に兩眼の涙といひ、かつて慌てし事なき主人が第一に立騒いで喚く體といひ、いづれも呆氣に取られて狼狽へれば狼狽へるほど吐り飛ばされ、前後まごつく度を負ふ折しも、店より例の重吉ぼんやり入り來りて、「おい雄吉どん今朝の勘定が違ッてるぜ、氣をつける

が宜い六十七錢も出し過ぎてる」といふや否、主人その横合より拳を固めて不意に喰はしぬ、「お痛、痛い」痛いなア知れきつた事だ間拔め、そこ退けッてば「へエ、何も私が不調法した覚えも」「え、退けッてば、わからない奴だな、それどころかい」「へエ、どなたか御病人で」「危篤なんだよ馬鹿ッ」

其七

雄吉が後押の車に飛び乗ッて驅け出せしを、主人は店頭まで見送りて何をか俄に思案の體、やがて奥へ入りて床柱に背を持たせながら、物もいはず腕を組み眼を閉ぢて、む、とばかり唇端を固く一文字に結びぬ、妻も娘も何が何やら更に分らず、此方より主人の様子を差窺うて互ひに聲を潜めながら、「おッ母さん、なんでせうね」「何だか、わたしにも知れないよ」「だッて今、雄吉が、泣いて居

ましたね」「さうさ、そして澤田とか何とか言ッたね、去年の冬、東京を飛出したとかも言ッたね」「さうですよ、そして泣いて居ましたの」「新聞にあるッて、何があるんだが、ちよいと見せて御覽」「はい、しかし、お父様も大層、急に慌て、變ですことねエ、雄吉が何を泣いて居たんでせう」「だから、その新聞をお見せよ、新聞で分る事があるのかも知れないから」雄吉が車を飛ばして立出でし程もなく、店より小僧が走入ッて一葉の名刺を主人の前に差出しぬ、「この方が御目にかゝりたいッて御來訪になりました、なだか大變立派な人ですよ二人曳の車で、もし御不在なら、どなたでも宜いから御家族の方に逢ひたいと言ッて在らッしやいます」主人おもはず其名刺を見れば「澤田雄太郎」さては今、澤田家の三男といひし雄吉の兄ならんか、父子兄弟いまだ會ふべき時刻ならねば、行き違ッて訪ひ来しものなるべし、さるにても無斷で家を飛出し其後さらに音信不通といふ

雄吉の我家にあること、いかにして知りしぞ、兎も角も此方へと主人みづから迎へ出でて見れば、年輩いまだ三十に届かざれど流石に自然の貫目を備へて、くろくくと漆に似たる鼻下の八字髭なほさら色白の目鼻に照り添ひつゝ、しかも笑はざるに溢るゝ愛敬を含み、はや脱捨てたる外套を車上に抛掛けながら、フロツクコートの前を合して一入さらに慇懃の體、なるほど面相どこやら雄吉に似たり、

「これは入らッしやいまし、私が當家の主人で」「左様で御坐いますか、私が澤田雄太郎、今回急用につきましたで當地へまゐりましたが、少々お伺ひ申したい事で」「ちやア、どうか此方へ、こゝは店頭で餘り、是非こちらへ」

奥の座敷に伴うて主客の席を定めし後、さて改めて來訪の主意を問へば、雄太郎いよく慇懃に言葉を正しながら、「突然、伺ひまして恐れ入りますが、もし御當家に雄三郎と申すも

のが御厄介になつて居りますまいか、其邊の義で」「や、その事で御坐いますか、なるほど居ります、實は昨年の冬、出入の車夫が口入で、勿論その車夫は數年以來、よく氣心の知つた正直者で御坐いますから、たゞその者の口約束を受人に立てまして、はい、しかし今朝、澤田様の御息といふ事が分りますや否、すぐと、二人曳の車で病院まで、お送り申しました次第で、それは儲おき御病體いかゞで御坐いますかな、まだ御意は得ませんが、なに貴方、御高名は兼て承つて居りますから、實に驚きましたよ、私風情の小賣店に、その御息たア、夢にも知らないコツて」「いや、何とも御禮の申上げやうもない事で、私が乃ち其兄で御坐います、元來あの通りの我ま、勝手に育つたもので御坐いますから、定めて種々な御面倒をかけました事で、はい、實は、私も今日まで、弟が何處に居るとも存じませんに、さすが父で御坐いますな、あんな奴でも子は可愛いと見えまして、なアに御主人、半年も以前から當

地の或筋に依頼して、御當家の御恩になつて居つたんですから、それも今朝になつて父が口から始めて聞きました始末で、いや全く、此度の、病氣はと、自分の心で何か覺悟いたしたからで御坐いませう、つきましては、何分にも取込最中、いづれ改めて御挨拶に罷り出ますから、今日は此ま、御免を蒙ります」「定めて御心配中、さアお構ひなく、私よりも御見舞に出まする筈ながら、わざと差控へます」「いや、有難う御坐います、何分にも心急ぎますから、いづれ」「折角お大事に、御如才あるべき筈は御坐いますまいが」「どうか、そのまゝ、そのまゝ、く」

其八

「お嬢様々々、まア大變ですことねエ、あの雄吉どんは大した人の御息ださうですねエ、道理で妾は始め當家へ來た時から、さう思ひましたよ、どツか尋常の人間と違つてるところ

がある、氏素性は争はれんもので御坐いますね」「お父様に委しく聞いたよ」「先刻、三十近い立派な八字髭の方が洋服で、旦那様をたづねて入らっしゃいました、彼人が雄吉さんの御兄様ださうですね」「さうだつて、妾も、ちよいと見たわ、どツか面貌が似てるね」「そりア貴嬢、兄弟ですもの、しかし雄吉さんの御父様が、何だか急な御大病ださうですね、それで思ひ當つた事が御坐いますよ、四五日以前、そら貴嬢の御使ひで白粉を買ひにまゐりました時、雄吉さんが關西病院から今、出ようとするところで、おや變たと思つて問ひましたら、なアに當院の藥局へ店の物品を賣つたんだつて、ぢやアあの時分から、秀つてたんだつね」「さう、そんな事があつたの、何故おまへ今まで黙つてるんだね」「だつて貴嬢、別段、申上げるほどの事でもなし、つい忘れて居りましたから、しかし、お嬢様へ、しツかり遊ばせよ、こゝが肝心の要で御坐いますよ、あの雄吉さんが、そんな大した身分と分つた以上は猶更」

しツかりしろつて、どうすれば宜いのか、さつぱり、わからないもの、え、もう、じれつた、い、そんな暢氣な事を仰しやる場合ぢやア御坐いませんがね、あの萬事に悠然とした旦那様さへ俄に驚愕なすつて、今も御夫婦の御談話を聞きますと、失禮ながら、お嬢様、當家の御身代を此ま、ひツくるめても、あの雄吉さん一人の小遣錢には少々足りないほどの大した身分ださうですもの、そんな貴嬢、立派な雄吉さんを、うかく、今こゝで手放したら、どうなさるんです、折角、妾が骨を折つて、あれまで漕付けたものだからさ、しツかり遊ばせと申すんですよ」「さう、お前のやうに言つたつて困るわ」「なに困ることが御坐いますものか、もう斯うなりやア大丈夫、天下晴れての勝負ですよ、お父様にもおツ母様にも、さう仰しやい、實はあの雄吉と、前からの約束があるんだから、是非あの人を養子にして下さい、もしこれが出来なきやア剃刀で咽喉筋を切るか井戸へでも飛込んで死んで仕舞ひますと、生涯一度、貴